

狂  
言  
記

088151-000-2

特53-209

狂言記 上卷

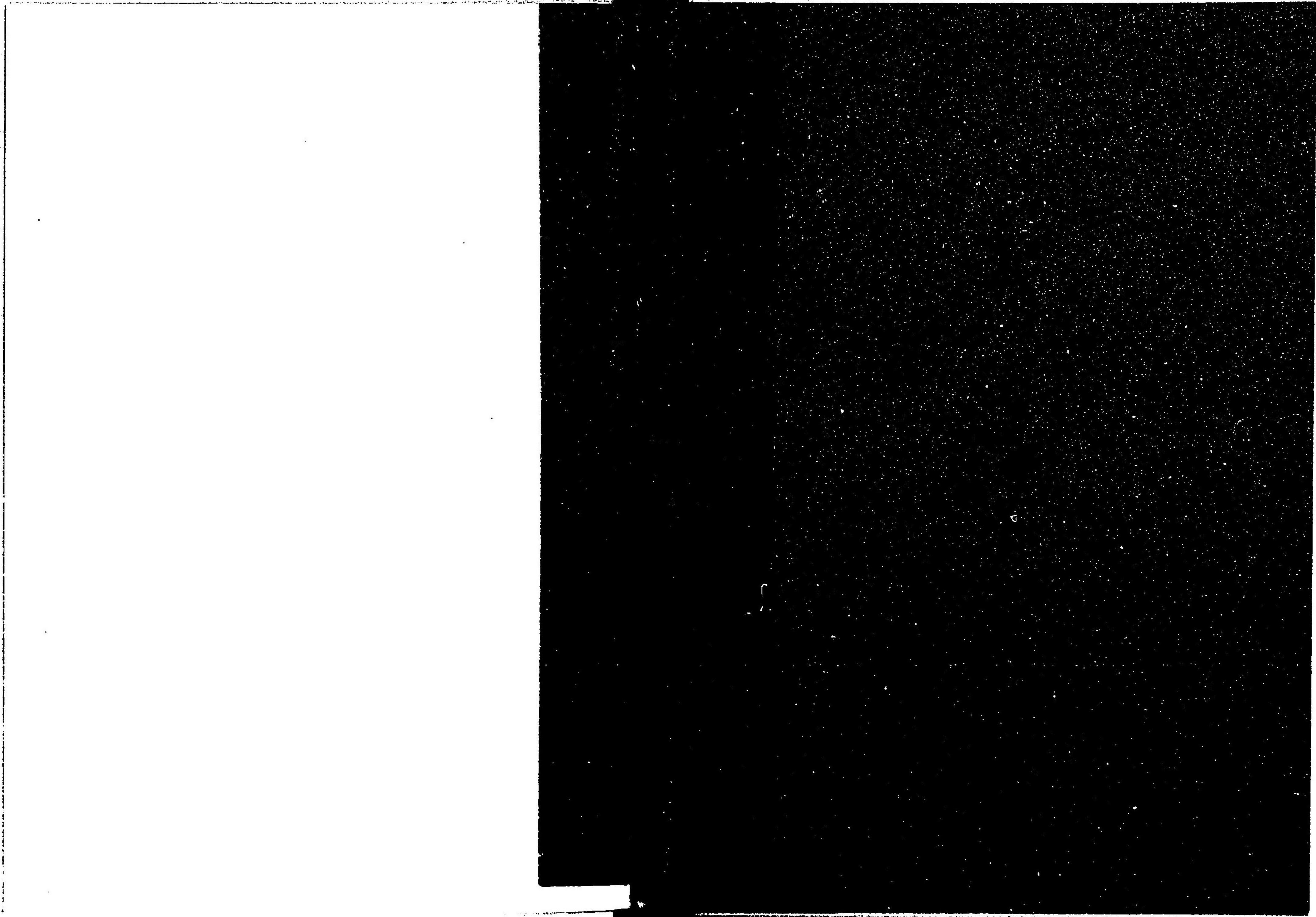
右文社

M26

DBH-0013









ルタツニ  
庫文



編 三 第

# 狂言記

卷 上

五定 社 文 右 二每

錢價 店 支 回月  
地番三町來矢區込牛市京東  
地番十町保神表區田神





Small stylized signature or seal in the bottom left corner.



特53 209

凡文庫

編 第三

# 狂言記

卷

五定 社 文 右 二每

錢價

地番三町來矢區込午市京東

店

支

回月

地番十町保神表區田神





緒言

『狂言とは如何なる者乎』、斯く堅苦しく問はれたらんには、予輩はまさ  
さに『所謂滑稽劇の一種にして、また打諢譚の部類に入る可きものな  
り』と應ふ可し、されどかゝる堅苦しき文學的解釋は、此狂言記を讀  
ませ玉ふ讀者に對しては、釋迦に説法、孔子に仁義、無用の無用の大  
無用なるものと謂つ可し、さりとして狂言の由緒を説き、其効能を述べ  
立つる、是れ亦無用の最第一、うれ位の事は皆様一昨日御承知の事な  
る可し、とは云へ書を編して緒言なきは、佛作りて魂入れず、飯を喫  
して湯茶を啜らざる如く、何となく物足りぬ心地するやうなれば、爰  
に古めかしくも出版の由來緣起を書き綴りて、聊か編者の責を塞ぐ  
べし、

某の詩人の云へり、狂言は足利文學の紀念なり、室町語の蓄音器な  
り、中世社會風俗の化石なり』とア、此紀念、此蓄音器、此化石、之を



馬鹿々々しく、つまらなく、面白くもなきものとして視る人も多からん、されど狂言には自ら狂言の價值なるものあり、之を見て面白からずと云ひ、つまらなしと云ひ、馬鹿々々しと云ふものは、結局狂言の眞味を解し得ざるもの、嘆語のみ、此書豈斯輩石部金吉者流の觀ることを望んで公けにするものあらんや、

狂言の古來作られたる演せられたるもの數百番、之を初めて梓に上せたる元祿年中にあり、爾來之を翻刻増補して公にしたるもの一二なきにあらず、されど其書今散亡して多く傳へらず、我社の此狂言記を出す、蓋し同好をして此得難き珍本に接せしめんとするの微意に出でたるのみ

數百番の狂言、之を實地に演じて面白く、しかも之を文字の上に現しては却て甚だ興なきもの少からず、本編載する所、蓋し實地に見て面白きものよりは、寧ろ文字に現して興あるものを選ぶこと多し、且つ

夫れ紙數限あるの小冊子、それすら悉く網羅することの叶はずして、讀者に隔靴の憾を懐かしむるもの多きは、編者の畢世の遺憾とする所あり、讀者希くは之を諒せよ

右文社の冠者

編者 三郎吾識

癸巳師走



鈔拔 狂言記上卷目次

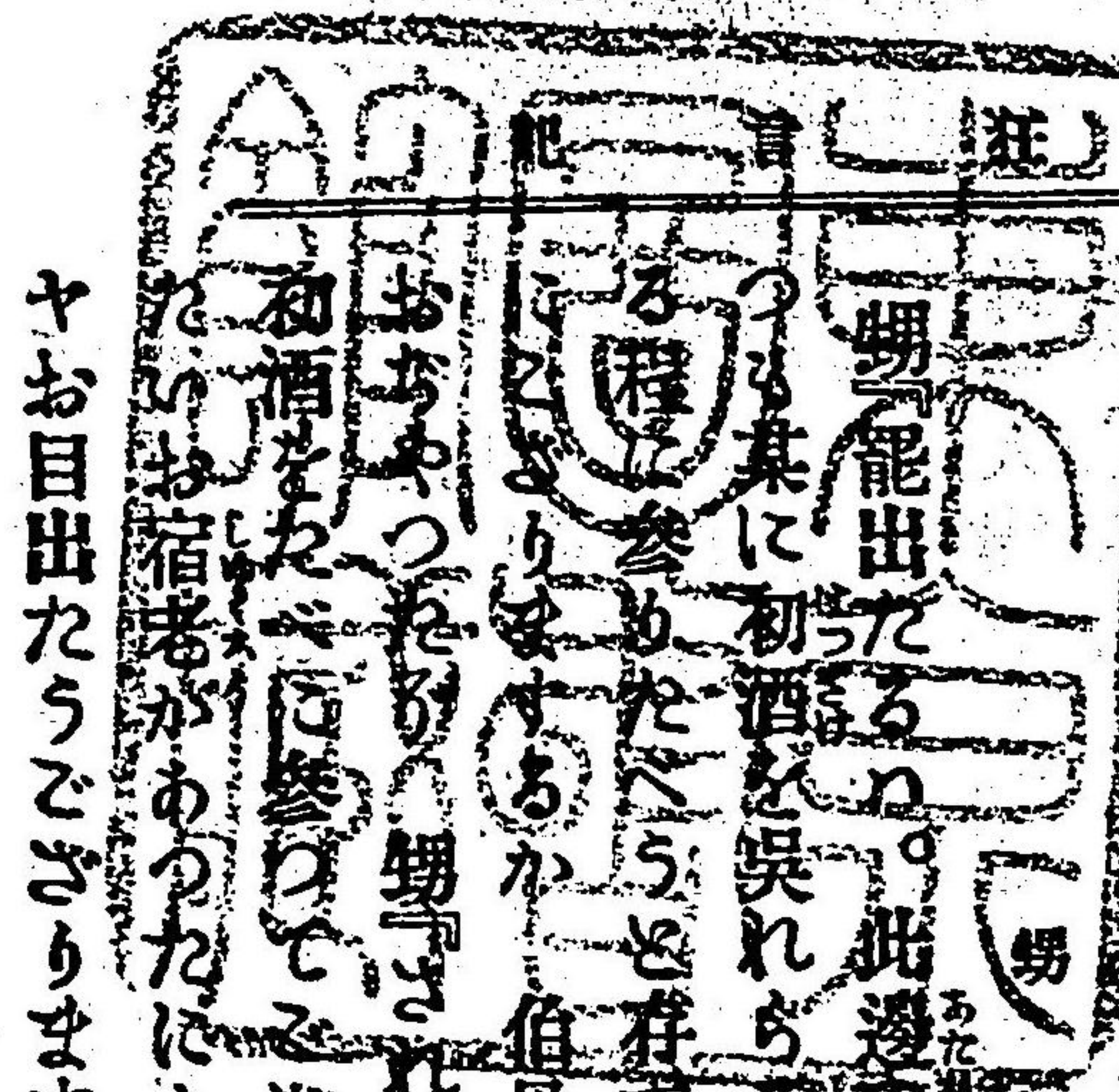
- |      |       |      |       |
|------|-------|------|-------|
| (一)  | 伯母が酒  | (三)  | 柿山伏   |
| (三)  | 薩摩守   | (四)  | 太刀奪   |
| (五)  | 宗論    | (六)  | ぬけのら  |
| (七)  | かくすい  | (八)  | すはじかみ |
| (九)  | 瓜盗人   | (一〇) | 八句連歌  |
| (一一) | 餌差十王  | (一二) | 笛争ひ   |
| (一三) | 笠の下   | (一四) | 寝音曲   |
| (一五) | つんば坐頭 | (一六) | 墨塗    |



鈔 狂言記

(三) 伯母が酒二人

半袴、鬼の假面 伯母



堀罷出たるの。此邊の者でござる。某の伯母は酒屋で御坐る。い  
つも某に初酒を呉れらるゝやうにござる。最早あがり時分でもござ  
る程に参りたるやと存する。とかう申す内には是で御坐る。伯母様内  
もあがり参りたるやと存する。伯母「堀殿か。ようれぢやつたのう。何と思ふて  
初酒をたゞで参りてござる。伯母「ノウ堀殿今年は此あたりを目出  
さいも宿堵がめつたによつて初酒をくれましたわいな。堀「ハア、ソリ  
ヤお目出たうござりまする。伯母「それはい、堀「したらば二番酒



狂言記  
 をたばませう。伯母「イヤ、今年は縁喜をかへてわが身にはもらぬ程に重ねておぢや。甥「ハア、其儀なら歸りませう。伯母「ようおぢや。のた。甥「ハッ。扱もく。伯母が憎い事を申さる。何と致さうぞ。イヤ思ひ附けた事がござる。是に鬼の假面たもとがござる程に、是をさて威たごしてのみませう。取つてかも。伯母「ハ、悲しや許さつしやれませい。甥「ヤイ、たのれたのれの手を見知つたか。伯母「ア、イエ、恐こい者でござる。甥「ヤイ、此酒部家さかべに棲すまむ酒がめぢや、知らぬか。伯母「ハア、イヤ、存ぞんじませなんだ。甥「おのれの今甥が来たど見へたが、伯母一人甥一人の者を酒を飲せたらなんだ、酷くい奴、取つて噛かまう。伯母「ハア、許さつしやれませい。甥「今度から飲しをるか。伯母「ア、飲のませう。甥「うれ程は身のまぶつてやらうに飲しをれよ。伯母「ア、飲のませう。甥「うんならおれも飲まう。伯母「うれにござりまする参りませう。甥「こちら向むかはれるな。たのれ、ヤ、うれ、こ

狂言記  
 ちら向むかげな。伯母「ア、イヤ、見ませぬ。甥「ヤイ、今年は酒がよいわいヤイ、ア、たのれたのれこち向むかげな、たのれたのれこち向むかいたら取つて噛かむぞ、ア、いかう酔ようた、是へ寄よりをろ、枕まくらにして寝ねやうに。伯母「ア、たのれは甥でなないかいヤイ。甥「ア、耻はかしや許さつしやれい。伯母「やるまいぞく。

(三) 柿山伏 二人

山伏 兜巾 鈴懸 珠數 柿主 長袴 小さ刀

狂言記  
 山伏次第「大峰葛城踏みわけて、我本山に歸らん。罷出たるの大峰葛城参詣致し、唯今下向道でござる、よき次手なれば檀那まはりを致さうと存する、先づソロソロ参らう、ヤレサテ物はしう存する。まだ先の在所は程遠とほざうにござる、何と致さうぞ、イヤ爰に見事な柿がござる程に、一ひと取つてたべうと存する。柿主「罷出たるは此あたりの者でござる、今日けふもまた行いて柿を見舞はうと存する、何と



致してやら鳥のついで迷惑致す、イヤコ、ナ、鳥がくふかして禁が落ちたが、ワア、核も落つるの、上に鳥が居るか、イヤ山伏が上つて居るの、何と致さうぞ、イヤ彼奴をなぶりませうぞ、ハア上に猿めが上つて居る 山「ハア柿主めの見附けたつた、何と致さうぞ柿「ハア、あれは猿ぢやが、身せふりをせう事ぢやが身せふりせぬ、いかな事ぢや 山「ワハ、某を猿ぢやと云ふが、ハアコリヤ身せふりませうぞ 柿「フン猿に紛う所はない、猿なら啼かうぞエ 山「ハアコリヤ啼かざるまい、キヤ〜 柿「ハア猿に紛う所はない、猿かと思へば犬ぢやげな、ワイヤイ 山「ハア又コリヤ犬ぢやと云ふ柿「犬なら啼かうぞよ 山「ハア又コリヤ啼かざるまい、ビョ〜 柿「ハア犬ぢや〜、犬かと思へば鷹ぢやげな、ワイヤイ 山「ハア又コリヤ鷹ぢやと云ふ 柿「鷹なら飛ぶぞよ〜、アリヤ飛んだの 山「アイタ、イタ、ヤイろこな者某が木の空にゐれば尊い山伏をイ

狂言記

ヤ犬で候の猿で候のと云ふてなせに腰をぬかしたゾ、急いで薬らうてかやせ、柿「ヤイろこ者、柿をくつて耻かしくの御免あれといふてれつとせでいね 山「ヤイそこな者、山伏の手柄には目に物を見せうぞよ 柿「柿盗みながら小言をいはずとも急いで往ね 山「ぢやういふものか、物に狂はせうの 柿「山伏置け、なるまいぞ 山「ぢやう云ふか、夫れ山伏といつば役の行者のあとをつぎ、難行苦行こけの行をする、今此行力叶いぬかとして一ト祈りを祈つたり、橋の下の菖蒲の誰が植へた菖蒲ぞ 柿「ヤイ山伏おかしい事せずとも往ね 山「ヤイぢやう云ふか、モ一ト祈りを祈つたり、ポウロボン〜、ソリヤ見たか、山伏の手柄には物に狂ふい手柄ではないか

狂言記

(三) 薩摩守 三人

僧 頭巾、ころも、笠 茶屋 長袴かづう桶の蓋  
船頭 半袴さし棹



茶罷出たるは、あたりの茶やで御ざる、ゆきくる人に今日も茶を  
 賣らうと存する、儲もく今日寂い事かな、人通りも御ざらぬよ  
 僧罷出たるは關東邊の愚僧で御ざる、左様に御ざれば諸國修行を  
 致し又之よりも大坂天王寺へ参らうと存する、まづろく参らう  
 茶ノウウ申し御坊、お茶参らぬか 僧是はさて、知らぬ人の茶を  
 くりやうといやる、立寄つて、たべうと存する、扱も道を歩けば、  
 あのやうなる慈悲深い人も御ざる程に、ハア、唯今はお茶のめどれ  
 つしやる、二つたべませう 茶ハア、おんぼありとも参りませう  
 僧扱もく、之はよい茶で御ざるの 茶イヤ身共が手茶で御ざ  
 りまする 僧モ一つたべませう 茶ハア、参りませう 僧之は  
 熱く御ざる 茶畏つて御ざるひめて進ませせう 僧ア、サテ喉乾  
 きに御ざつたに。丁度よう御ざる、モ、こう参る 茶御ざりまする  
 か 僧辱うこそ御ざれ、かうまいる 茶申し御坊にも忘れはな

されませぬか 僧されば珠數もれりやる、かさも有る、イエ何も忘  
 れの致さぬ 茶ノウウ御坊、茶代を忘れさつてやれた 僧フン、其  
 茶には代りがないりますか 茶ハレ、サテ、茶屋の茶に錢のいらぬと  
 いふ事がれぢやるか、一服一錢でありやるわいの 僧ハレ、またら  
 ばのひまい物をば、ノウウ茶屋殿、錢は持合はせませぬ程に、此珠  
 數を置てまいる 茶シテほんばんに。御ざらぬか 僧中々、れり  
 やらぬ 茶シテ又此方はとれへひけて御ざる 僧イヤから天王寺  
 へ参ります 茶まちつと行かしやれば神崎の渡しとて船の御ざる  
 がそれはおんど遊ばつしやるが 僧イヤそれは渡つて参る 茶渡  
 るやうな川では御ざらぬ 僧イヤ其儀ならば船賃のもたず、神  
 佛は見通し、之から下向致る 茶ノウウく見ますれば。餘り傷はじ  
 ひ儀で御ざる、船賃の進せう 僧之は扱茶の錢進せぬ上に。船賃迄  
 では辱うこそ御ざれ、さらば是へ下されい 茶ノウウ御坊、イヤ某



船賃の進せうと申するは別のことで御さらぬ、あの渡守は秀句好  
 で御ざるによつて、此方に唯乗せる秀句ををすへて進せうといふこ  
 とで御ざる 僧「ハレさて辱うころ御ざれ、シテうれは何と申しま  
 せうぞ 茶「あれへ御ざつたらば先づ船にのらつしやりやう、其時  
 に、船賃といはふ時に。平家の公達薩摩の守忠度と、チャどれつしや  
 れい 僧「ハア、でけました、たゞ乗るによつて。たゞのり、ハア辱  
 うこそ御され、かう参りまする 茶「下向道にのらつしやれい、  
 僧「ハア、さればこそよ、茶やのいふ如く、大きな渡しが有る、渡守  
 は居ぬか、爰元にあるぞ 船「罷出たるは。此所の渡守にて御ざる、  
 今日日は日並もよう御ざる程に定めてのりても御ざらう、ろろく参  
 る 僧「イヤあれへ渡守と見へてまいります、よびませうぞ、はら  
 い 船「なんぢやヤイ 僧「船にのらふヤイ 船「此處は大事の渡し  
 ぢやによつて一人や二人のせぬはヤイ 僧「道者は數多多いわい

狂言記

ヤイ 船「幾人程あるぞ 僧「百人もおりやるわいの 船「イヤろん  
 ちらばのせう、御坊、シテ其百人の道者の 僧「イヤ皆は後からく  
 る。某の先達ぢやによつて先へ行ねばならぬ、渡してたもれ 船「何  
 をねえやるぞいの、一人や二人を渡す處ではねぢやらぬいの 僧「ノ  
 ウ船頭百人の船賃の渡さう程にのせてたもれ 船「イヤろんなら渡  
 しませう、さあくくのらつしやれい、ノウく、此方の今のやうなの  
 りやうが有るものでねぢやるか、船がいかう不案内と見へており  
 やるよ 僧「ノウ船頭、此船には底に穴やなんどはないか 船「や  
 ア、あのぼんのいはします事わい、穴があつてよい物でありやるか、  
 シテ御坊は、どれからどれへ御ざるぞ 僧「イヤ關東から天王寺  
 へ参るものでねりやる 船「お若う御ざるぞ近頃殊勝に御ざる、シ  
 テ御坊いひたひとが御ざる 僧「何でか御ざるぞ 船「イヤ、船賃の  
 貰いませう 僧「イヤ、向ふへ着いてから貰せう 船「ノウ御坊も

狂言記



狂言記

ともさういふで乗り逃が數多おほふれぢやつた、今はうれぢやによつて川中に取りまする、それををくしやらぬ人は向ふる島へ打上げをさまする。僧「ア、こはいとをれしやる、船賃の、したらわたる。船」受取ませう。僧「平家の公達。船」イヤことをいはずとも渡しやれい。僧「イヤ秀句でわたる。船」イヤ何とおしやるが、某の秀句をすく事の、關東まで聞へてねぢやるか。僧「中々、神崎の渡守秀句をすきぢやといふ事は關東にしらぬ者のいれぢやらぬ。船」扱もくそれは實でおちやるか、眞實か、ワ、扱もく徳をとるより名をどれぢや、秀句でうけとりませう、シテ何と。僧「平家の公達、薩摩の守、面白う御ぢやるか。船」面白う御ざる、シテあとい。僧「向ふで渡る。船」中々向ふで受取ませうが、後の面白う御ざるの、僧「面白うことで御ざる。船」ハレサテ、此方のやうなる御坊とも存せず、のせうののせまいのと申した、又下向道には二日も三日もと

狂言記

めまして船遊びをさしませうが。僧「辱うこう御ざれ。船」身持をさつしやれい、やがて船はつきまするが。僧「心得て御ざる。船頭」サア上らつしやれい、シテ今のあとい。僧「平家の公達薩摩の守、薩摩の守、かみでねりやる。船」イヤ其あといが聞たうねりやる。僧「ハツテ茶やが何とやらいふたが。船」ノウばん、秀句に茶屋は入るまい、あといは、何とめさるが、イヤあとい聞たう御ざる。僧「あとい平家の公達さつまのかみ、ハア今ねもひ付た。船」何と。僧「物ど。船」なにと。僧「青海苔のひきばし。船」おんでもない、とつどいかしませ

(四) 太刀 ばひ 三人

大名 立烏帽子 長袴 小刀 冠者 半袴  
男 半袴 太刀を持

大「罷出たるは隠れもない大名。太郎冠者あるか。冠」御前に大







僧二人 柿ころも 珠數 宿 長袴

法華次第「妙法蓮華經」。蓮華經の經の字を仰山と人や思ふらん。罷出たるは都本國寺の坊主で御坐る。此度思ひ立。甲斐の身延に參詣致し、唯今下向道で御坐る。ヤレさて身延と申す所は聞き及ぶたよりは殊勝な所でござる。若い折にかやうに修行を致さねば老ての物語が無いと申す。先づそろ／＼上りませう。イヤ程は參らねども草臥れてござる程に。先づ此所に少し休らひませう。淨土次第「南無阿彌陀佛」の六の字をむつかしと人や思ふらん。罷出でたるは。東山黒谷の愚僧で御坐る。信濃國善光寺へ參り唯今下向道でござる。先づ／＼上りませう。あれへよさうなる道連が行かる。よびかけ道連に致さうと存する。シ、申し 法「此方の事でござるか 淨」中々 法「何の御用でござるぞ 淨」シテこなたはどれからどれへござるぞ 法「イヤかう上方へ參る愚僧でござる 淨」エ、身共も

狂言記

上ります。卒爾ながら道連にも成らしやるまいか 法「イヤ身共も連欲しいと存する所に、合ふたり叶ふたる事でござる。都迄は同道申さう。ハレ扱嬉しや。サアござりませい 淨「先づござれ。先でござる程に 法「參らうか 淨」ござれ。ノウ申し。かうして同道申すからは。乃至は此方の方にも又身共が方にも五日十日暇の入る事が御坐ると儘よ。待合せ同道致さうぞ 法「中々五日十日の事は扱置かつしやれい。一くわん日でも待合せ都迄は同道申す 淨「ハレサテよい御坊に出逢ふた事哉。シテ此方は都はどこともとにござるぞ 法「イヤ本國寺の愚僧でおぢやる 淨「イヤ彼奴はかれい的情強でねぢやる。道すがら争ひませうぞ 法「ノウ／＼御坊。シテ其方ハ又どこともとでねぢやるぞ 淨「イヤモとこと申したらば京邊土の者でねぢやる 法「イヤさうおしやれば心憎うおぢやる程に。名乗らしやれ 淨「其儀ならば名乗りませう。黒谷の坊主でおぢやる

狂言記



狂言記

法「ハレサテ、おどましい者と連立つた事ぢや。浄「イヤハヤ、モ厭がるで見へました。法「ノウウばん。シテ其方は又此方へはどれへ行かしましたか。浄「いや信濃の國善光寺へ参りておじやる。法「ヤア参いで叶ひそむない坊主ぢや。浄「シテ又其方はどの方へ行かしましたか。法「イヤ甲斐の身延へ参詣致した。浄「オ、参らいで叶はぬ御坊ぢや。法「ノウウく御坊。其方に異見がいたうおぢやるはいの。浄「何でかおじやるか。法「あうこの隅でもこの隅でも黒豆を敷へ。ぐどくと願はふよりも。其方其珠數を切つて法華にならせませ。浄「イヤく法華にはありともなうおぢやる。其方にも異見がしたいは。一部八巻の。二十八品などして事むづかしい事を願ふよりも南無阿彌陀佛とさへ申すればよいに某が法にならせませ。法「イヤくなりともなうおぢやる。ノウウく。浄「何でかおぢやる。法「ハツタと忘れた事がおぢやる。あの向ふに見ゆる在所へ某は寄らぬ

狂言記

ばならぬ。浄「イヤ某も寄らう。法「イヤ先へ行かさせ。浄「イヤ待合せうと約束でおぢやる。ノウウく。法「其方のやうなる人に構はうよりも。某は先へいたがようおぢやる。ハア嬉しや逃延びて御座る。浄「ノウウ御坊。ハテサテ人に走らしやつた。法「エ、コ、ナ其方とおれとあみつれた身かい。浄「イヤ都までは同道申すとの約束でおぢやる。法「イヤハヤ連立てならば連立たう程に。某が珠數の忝きくも日蓮上人より傳はりの珠數ぢや程に。ちつと戴さやれ。浄「戴きたか其方戴け。法「イヤ是非とも戴かせう。コリヤく。ハ、うれしや思ふ儘に戴かした。浄「ノウウく某が珠數も。忝くも法然上人よりの傳はりの珠數。ちつと戴さやれ。コレくハアうれしや戴かした。まつと戴かせう。イヤコリヤ見失ふて。ハテサテ物怪な事をした。法「ハア嬉しや逃延びて御座る。先づ此所に宿を取りませう。ものも案内。宿屋「ヤ、表に案内が有る。御案内は何人で御座



狂言記  
 るが 法「イヤ旅の坊主で御座る。一夜の宿を貸さつしやれい 宿  
 『安い事で御座る。奥の間へ通らしやれい 法』畏つて御座る。亭主。  
 出家の相宿いやで御座るが 宿「心得ました 浄」これはサテ是程に  
 行延びはせまいが。日も晩じて御坐る程に宿を取りませう。ものも  
 御案内 宿「ヤ。表に案内が有るが。案内は何人。エ、最前のやうな御  
 坊ぢや 浄」ノウノウ〜最前も某がやうなるばんが宿を取つて御座る  
 か 宿「中々、宿を取らつしやれて御座る 浄」某にも貸して下されい  
 宿「イヤ出家の相宿いなりませぬ 浄」イヤ先程の御坊は某と弟子  
 兄弟で御座るが。言論を致しなさへで御座る程に。某にも貸して下  
 されい 宿「心得ました 浄」ノウノウ〜御坊 法「イヤ其方の何とし  
 て来たが。ノウ御亭。別の間はおぢやらぬか 浄」ハテさて無いと  
 おしやるワイノ 法「其方が構ふてのやうワイノ。シテ其方は某に  
 後先に附てまふは。法問ばしまても見やうと思やるか 浄」イヤ誠

狂言記  
 によい所へ氣がついた。夜長にもおぢやる程に。いざ法問を致さう  
 ず 法「先づまたらば其方からおしやれ 浄」まづうつちおしやつた  
 がよいは 法「フン其儀ならば語らう程に。どちらなりとも負けた方  
 は珠數を切らす程に。さう思やれ 浄」先づお語りやれ 法「耳の  
 垢を取て聞かせませ。先づ五するてん〜隨喜の功德と云ふ事が有  
 る。聞きやつた事が知らう 浄」誠にどこでやら聞いておぢやる  
 法「聞かいで何とせう。三國に憚る程の法問ぢや 浄」まづいかい事  
 をいはずとも語らせませ 法「まづ五するてん〜隨喜の功德。又は  
 涙とも説かせられたる法問な。大地を割り芋の子を植ゆる。天地の  
 潤ひを以てすいさを出す。たけゆる〜とせいじんしたるを。又物  
 で以て薙倒し。辛子でカラ〜とあね。檀方がたで下さるゝ時は。た  
 う〜て有難うて涙がこぼるゝを以て。五するてん〜すゐさのく  
 ぞく。又は涙とも説かせられたる法問は。有難い事でおぢやらぬ



か 淨「まつた説かせませ 法」イヤ是迄でおぢやる 淨「シテそれは誠でおぢやるか。それは辛子が辛うて涙がこぼれた物でおぢやる。法」先づ小言を云はずとも其方も説かせませ 淨「オ、宗論でおぢやる程に某も申す。是へよりて聞かせませ、一念彌陀佛即滅無量罪と云ふ事があるお聞きさやうノウ 法」オ、誠に聞はつゝたやうにおぢやる 淨「其方の身の上にもある事、又某が身の上にもある事、檀方がたへ齋に参れば。事たらふだるお方へ参れば醍醐のうせめ鞍馬の木の芽漬のべん麸椎茸無量の菜をみちくして下さるゝ、かの事たらはぬお方へ参れば焼塩一菜で下さるゝ、かの無量の菜がみちくしてあると思ふて心に観念して下さるゝを以て、一念彌陀佛即滅無量罪又はさい共説かせられたる法問な有難うのおぢやらぬか 法」まつた説かせませ 淨「是迄でおぢやる 法」シテそれが誠でおぢやるか 淨「中々 法」しつかい唯うれはむざい餓鬼と云ふ物で

おぢやる 淨「イヤくむざいがさではおぢやらぬ 法」ないものをあると思ふて食へば無罪餓鬼ではおぢやらぬか 淨「イヤ其方がやうな者に構をよりも非學者論義に負じと申す事がある先づ念佛誦いたしたがゑい 法」イヤ、まつといはしまさいで、イヤ某もチトまどろみませう 淨「イヤ、とから申す間にお経時になつたクワくくなまいた 法」しつかいあの坊主の夜の目が寝られぬと見へた、某も看經をいたそう 淨「イヤ負じ劣らじと精を出さるゝ、何とがなしてあのぼんを浮かしたいと存じます、イヤ思ひつけた事がござる、一遍上人の踊り念佛がござる、之を申しませう、なもだく 法」イヤ某も負は致すまい、蓮華經く 淨「なもだ 法」蓮華經く 淨「なもだく 法」なもだく 淨「蓮華經く 兩人」是はいかな事取違へてのけた、げに今思ひ出したり、しやくざい靈山妙法華、今在西方妙あみだ、娑婆示現觀世音、三世利益同一体と、此



文の聞く時は法華も彌陀も隔てはあらじ、今よりしては二人が名をば、今よりしては二人が名をば妙阿彌陀佛とぞつけうよ

(六) ぬけがら 二人

殿 長袴 小き刀 冠者 半袴

殿「罷出たるは御存知の者、冠者あるか」冠「御前に」殿「念なう早かつた、汝呼出すは別義でない、彼のさまへ参つて此中はお人でも進せぬが何事も御坐らぬか、冠者を見舞に進ずると申して急いでいてこい」冠「畏つてござる」殿「急げ」冠「ハア、扱も々々頼ふだる人はいつも彼の様へ行く折は酒を呉れらるゝが今日は何と致してやら忘れられてござる、マ一度戻つてたべるやうに致し、申し殿様、ござりまするか」殿「何として戻つた」冠「其事でござりまする、久しうて人を進せらるゝ程に、御状を遣されたらようござりませう」殿「イヤ状まではいらぬ急いでいてこい」冠「畏つて御坐る、之は扱

狂言記

狂言記

何としても呉れられぬ、イヤ思ひ附けた事がござる、申し殿様「何として戻つた」冠「其御事でござりまする、殿様は何事もないかなどと問はしやる時には何と申ませうか」殿「ハテサテいらざる念を遣ひをる事かな、ハア思ひついてござる、いつも彼奴に酒を呉れまするが今日は呉れずにやればまひ戻り〜致す、飲ましてやりませう、ヤイ冠者、之へよつて酒を二つのふでいけ」冠「ハテひよんな事をおしやれまする、身共がかうして戻りまするも酒がたべたいではござらぬ、モかう参りまする」殿「二つのふでいけ」冠「ア、ソリヤようござりませう」殿「サア〜」冠「イヤお酌、慮外にござりまする、之へ下さりませう」殿「サア〜受い〜」冠「ハア」殿「よい酒か」冠「イヤ何とござつたも覺へませなんだ」殿「したらばま一つのめ」冠「ハア、ア、ござり升〜、申殿様身共に此やうにお氣をつけられまするをば傍輩共もいかうけなりう思ひまする、モ一つのた



狂言記  
 べませう 殿「すげふのナ 冠」イヤ数がわるうござりまする 殿  
 『サアのめ 冠』ハア、ア、いから酔ふたかな、イヤ 殿「急いでいて  
 こいヤイ 冠」どこへ 殿「かのさまへ 冠」いさまするわいの 殿  
 『早ういてうせう 冠』ハア、いさまするていに、ア、いから酔ふた事  
 かな、うれでころなれようろの此男ののますに行よう、めがゆくく  
 おめが行き候、ア、いからよふた、先づちつと寝ていからず 殿「ヤ  
 レサテ冠者を使にやつてござるが又彼奴め酒にゑいて伏して居  
 かして遅うござる、いて見て参らう、さればこる余念もなう寝て居  
 る、何と致さうぞ、思ひ附けた事がござる、之に鬼の假面がござる  
 程にさせて置ませう、まんくどさせました、先づ急いで歸らう  
 冠』ハア、いから寝た事かな、枕下りに寝たかして、ハア顔の重う  
 ござる、あの清水へいて手水をつかひませう、ノウ悲しやの、許さ  
 つしやれませい、扱もく清水に鬼のある事は存せなんぞござる、

狂言記  
 さし前があるならば彼奴を仕留めたるうござるが、頼んだ人に仕留め  
 させませう、さり乍らマ一度とつくりと見ませう、是はいかな事お  
 れがするやうにするが、イヤ之はおれが鬼になつたげな、ハア悲し  
 や扱もく人悪かれども存せぬが親祖父の報でござるか、鬼になる  
 ならい生をかへてなりともならいで生をがら鬼になる事は何の因果  
 でござるぞ、さり乍ら之では何處へまいつたとも抱へ人はござるま  
 いが何と致さうぞ、何と致したとも馴染のかどでござる程に頼んだ  
 お方へ参り、どうぞ申して見ませう、殿様ござりまするか 殿「冠  
 者戻つたか 冠』ハア歸りましてござる 殿「ノウ恐ろしや鬼をば冠  
 者に使はぬ、ヤレろちへ行け 冠』申し殿様冠者は冠者でござる、何  
 といふ因果でござるやら此やうに鬼になりました、今迄のやうにこ  
 ろはつかはされませずとも門の番なりともさして下されませう 殿  
 『ヤいろこなもの、鬼に番させたらば人出入あるまい、其方へいてく



れ抱へることならぬぞ。冠「お馴染の門かどにさへさやうでござる程に身共も覺悟致してござる、もとの清水へいて身を投げませうす、扱もく此やうある因果のありさまにありても命と云ふ物は惜しいものでござる、是から寝ころびうつてあの池へばまるならば難なく身は投げませうす、エイ爰なぬけたは、申し殿様ござりまするか。殿「エ、コリヤ冠者の來たか、そつちへ行け。冠「イヤ申し本ほんの冠者でござる。殿「何としたぞ。冠「これごらんじやれませい、鬼のぬけがらでござる。殿「何でもない事しざりをれエ。冠「ハッ

(七)あくすい 六人

舅 長袴 小き刀 冠者 半袴 婿三人 長袴 小き刀 娘 なとこせの面に小袖をかづく

舅「罷出たるは此邊の者で御ざる、左様に御ざれば美人の娘を一人持てござる、何にのよるまい藝のたつたる、和歌の心のあらうす

る人を婿に取らうと存ずる、先づ太郎冠者を呼出し申つけふと存ずる、あるかヤイ。冠「お前に。舅「念なう早かつた、汝呼出すは余の儀でない、彼内かみといふたる高札をあげい。冠「畏つて御ざりまする、札はをあげて御ざる。舅「婿のわせたらは是へと申せ。冠「畏つて御ざらる。一婿「罷出たるは此あたり、の者で御ざる此山のあなたに有徳うとく人が有る、何にはよるまい藝のたつたる、和歌の心のあらうす者を婿にほしがらうと申す、先づ何かはしらすいて見ようと思存ずる。イヤ程なう之で御ざる、物も、御案内。冠「ヤウきとくや、表に案内がある、コリヤ何人なにかで御ざりまするか。一婿「札はの面おもてに付て参つておぢやる、其方そなたの御内みうちの冠者をおぢやるか。冠「ハ、一婿「其儀ならば某たがのさた様子を奥へおしやれ。冠「畏つて御ざる、申し御ざりまするか。舅「何事で有る。冠「婿様の御出でござりまする。舅「おせに此方こなたへと申さぬ。冠「畏つて御ざるおはいらなされませう。一



狂言記  
 婿「心得た、わリヤどなたぢや 冠「舅殿で御ざる 一婿「不案内に御ざりまする 舅「ハテサテようこ御ざつたれ、先づ下に御ざりませい 二婿「罷出たるハ御存知の者で御ざる某が藝を表に立札の面につき婿入を致さうと存するイヤ先づろろく参るや、程なう之で御ざる、物もお案内 冠「ヤ、又表に案内の有る、是はどなたで御ざりまするか 二婿「イヤ、札の面について参つておぢやる合点でおぢやる 冠「ハ、それに御ざりませ上へ申しませう、又婿様の御ざりました 舅「なせに此方へと申さぬ 冠「畏つて御ざる、御はいりなされませう 二婿「オ、心得てある、あれに御ざるは舅殿か 冠「ハ、二婿「不案内に御ざりまする 舅「ようこそ御ざつたれ、先づ下に御ざりませい 二婿「ハ、こりやどなたで御ざりまするか 一婿「ハ、イヤ身共も婿で御ざる 二婿「ハ、存じませなんだ 一婿「今からは申合せませう 二婿「互ひで御ざる 三婿「罷出たるは此

狂言記  
 あたりの者で御ざる、此中は何と致したやら、仕合もあしう御ざるほどに、承れば、有徳人が有り婿のいる由を承はる程に、参り婿にならうと存する、物もお案内 冠「ヤ、又表に案内がある、お案内はどなたでござる 三婿「イヤ、札の面について参つた者でおぢやる 冠「ア、合点で御ざりまする、うれに待たしやれませい、申しござりませるか 舅「何であるが 内「又婿様の御ざりました 舅「此方へと申せ 冠「おはいりなされませう 三婿「太郎冠者案内者をせい 冠「畏つて御ざる、あれにござりませるか舅殿で御ざりまする 三婿「不案内に御ざる、御免なりました 舅「婿殿で御ざるか、ようこ御ざつたれ、先づ下に御ざれ 三婿「ハ、コリヤいづれも様はコリヤどなたで御ざりまするか 一婿「イヤハヤ私等も婿の望で参つた者で御ざる 三婿「ハテサテ、コリヤいかい事らつてやる事でござりまする 舅「扱執れもに申す、娘ハ一人御ざる、何人成と



も藝のたつたるを婿にとりまする程に左様に心得さつしやれ 三人の婿』畏つて御ざる 舅』太郎冠者盃をもてこい 冠』畏つて御ざる 舅』先づうれいづれもへ進せし 一婿』イヤまづお前、上りませう 舅』其義で御ざるならば是からたべて申そ、一つうけ持て御ざる程に、いづれも順の舞に立姿が見たうおぢやる 三人の婿』畏つて御ざる 一婿』先づ此方舞はつまやれい 二婿』先で御ざる程に先づ此方舞はつまやれい 一婿』またらば不調はうなづら身共が舞ふてまはしませう 舅』ハ、ハ、ようでけました、扱次のまはまやれい 二婿』畏つて御ざる 舅』ハ、ハ、さりとてはようでけました、サ、こなたも舞はまやれい、順で御ざる程に 三舅』舞ひまする 舅』さりとてはハヤ見事で御ざる、どれれと申しやうも御ざらぬ、扱此上からの娘を呼びます程に、兎角は唯御縁次第がよう御ざる、此兎角といふ方につけて歌を一首づゝ聞たう御ざる 三人の婿』畏つ

## 狂言記

て御ざる 舅』先づ其方からようでまはさつしやれませい 一婿』心得て御ざる、かうも御ざりませうか 舅』何と 一婿』播磨紙いかなる人がかくすいて筆は走れど文字は留まると致して御ざる 舅』ア、一段でけて御ざる、扱次な遊ばせ 二婿』畏つて御ざる、かうも御ざる、信濃なるあさだの小田をかくすいて一もと植へて千本を分かると致して御ざる 舅』ア、一段でけて御ざる、扱次を遊ばせ 三婿』畏つて御ざるかうも御ざら 舅』何と 三婿』西の海千尋の網をかくすいて水はもるれど魚はもらさじと致して御ざる 舅』一段でけて御ざる、身共は振舞を申付ませう程にあの娘と對面なされ、どなたありとも、御縁のある方が、留らまやれませい 三人の婿』畏つて御ざる 一婿』扱いづれも早う御ざれども、身ども先で御ざる程に、先づ身共が對面致らうす 二婿』一段で御ざる、コリヤなせに、歸らつしやる 一婿』身共はあなたにいやと御意なさるゝ

## 狂言記



程に、いづれもそれにゆるりと御ざれ 三婿こなた扱此方御ざれ 二婿  
『畏つて御ざる、イヤ身共もかう歸りまする 三婿』これはいかなる  
事、あなたに身共をと思召すものであるうす、先づいてちと見ませ  
うす、申し其上きんな衣を取らしやれい、なせにいやとたつしやる、  
千年末代、ういふする人が、是非ともきぬをとらしやれい、ア、悲  
しや、コリヤなへで御ざる、ハア悲しや

(八) 酢ハじのみ 二人

サウリ くくり袴 竹杖に酢筒を附けてかたぐる  
はしかみ賣 くくり袴 竹杖に藁つこうを附けてかたぐる

はじかみ』罷出たるは山城の國の 姜賣はじかみうりでござる、又今日も商賣  
に參らふと存する、夫れ商人とは、足をはかり聲をはかりに商はね  
ばあらぬと申す、先是から呼びませう、はじかみこん 酢』罷出  
たるは和泉の國の酢賣でござる、又今日も商ひに參らうと存する、

ヤレサテ一段の日和ひよりに出合せたる事かな、先賣りませう、酢こん  
は『ヤイそこな者耳のいたへ寄りて何をすこんく』と云ふが 酢』ヤ  
イ、うこなもの、お主はまた何をはじかまる〜と云ふが は』ヤ  
イ、それが何事をいふたと儘よ、此藁づどうなどにはいから系圖の  
あるものぢや 酢』何と云ふが、其藁づどうに系圖があると云ふか  
は『中々、ある 酢』ちつと聞きたうおぢやるの、ハ』イヤ、知らず  
ば云ふて聞かせう、わらづどうに黄金こがねと云ふ事がある、其上はじかみ 姜  
なぞにはいから系圖の多い物ぢやが、そちの酢なぞにハ系圖があるま  
い 酢』イヤ酢にこそ系圖がねぢやれ は』なんぢや酢にも系圖があ  
ると云ふか 酢』中々おぢやる は』ヤ、ちつと聞きたうおぢやるの  
酢』中々、語つて聞かせうが、シテ位にまけたならば其方は賣子に  
なるか は』をんでない事、何方どなたなりとも賣子にあらうが 酢』さら  
ば是へ寄つて聞かせ、昔推古天皇の御時に、一人の酢賣禁中を賣



廻る其時わらぬん酢賣々々ど召されしが、すの門をスルリと通り、すのこ様にスクと立てれぢやる、其時わらぬんすき張障子をスルリとわけ、スル〜と御出あつてすきの酒を下された、一つたべ、二つたべ、三つ目に御詠歌を下された、お主是を聞かうするよ。は『急いで語りやれ 酢』住吉のすみに雀が巢をかけて、さぶや雀のすみよかるらん、と下された、是にましたる系圖はあるまい、賣子にあらせませ。は『先づ某それごともお聞きやれ、昔光孝天皇の御時、姜賣はじかみど召されしが、から門をからりと通り、から椽えんにかしこまる、其時わらぬんから紙障子をカヲリとわけてカラ〜と御かんわり、辛さお酒を下されたり、一つたべ、二つたべ、三つ目にお肴どてお歌を一首下された、是へよつて聞せませ。からしから物から木で焚たいてからいりにせん。と下された、之にましたる系圖はあるまい、お主賣子にならせませ。酢』イヤハヤ是もよつぽどの系圖でおぢやる。さりお

## 狂言記

から推古天皇も光孝天皇も位は同じ事今からは相商あひあまたひに参らうず。は『誠にれしやる通り酢のいる所にははじかみもいらう、サ、先づ賣らせませ、とれへ向けて参らうず。酢』まづ直すに行かせませ。ハ『ヤア某それごとは鳥丸通りへ参らうず。酢』先づ賣しませ。は『心得てござる、はじかみこん。酢』すこん。は『のう〜あれを見させませ、いかい紙みせでれぢやらぬか、あれは皆から紙でおぢやる程にノ。酢』ノウろばに積んだはすぎ原でれりやる。は『おちやうしませ、此店を見さしませ。酢』ハテゑいせもの。は『あれを見さしませ、からのかしらぢおぢやるわいノ。酢』焚たく物はすいぎうでれぢやる。は『ノウ〜此藪を見さしませ、ハレいかい大竹でれぢやるノ、ノウ皆から竹でおぢやる。酢』あれをスツカと切て酢筒にしたらばようたぢやる。は『ハ。よつぽどにおしやらいで。酢』イヤ思ふ事の色外に現はる〜とやらで、酢筒の欲しいと思ふ事ぢやによつて申した事でお

## 狂言記



ぢやる ば『ノウよつぽど来ておぢやる 酢』爰の何處でおぢやる  
 は『ねはんじよへついでれぢやる、あの桃を見させませ 酢』ハレ、い  
 かい桃でおぢやる は『あれの、皆からもでれぢやる 酢』ノウ之  
 を見させませ、すも、でれぢやる 』『ノウ程さう五條河原へついで  
 おぢやる、時の物とてやさしやからるもぎのいかい事おぢやる 酢  
 『ノウすぎ菜も背くらへして居るの』アレ、かみを見させませアレ  
 子供のからからは 酢』あれはすまひでおぢやる は『ノウくアレ  
 く川上をからげて渡るの 酢』イヤあれの裾をぬらすまいが爲で  
 おぢやる は『ノウく清水寺にはおちとありとやらがしきなりと  
 やらゝあると云ふが其方は望みはおぢやらぬか 酢』イヤ身共も参  
 らう は『程なうついでれぢやる 酢』ノウれちとなりとやらはすぎ  
 たと申すは は『其儀でおぢやるならば某は千句に一句でからと笑  
 ぶて歸らうと存する す』イヤ某もすみかへ向けてすつこも

記 言 狂

(九) 瓜 盗 人 二人

盗人 半袴、上下、腰帶、瓜主、同上

瓜『罷出たる者は此あたりの耕作人でござる、當年は瓜を作つてご  
 ざるが、身共の仕合でよう出来てござる、今日は畑へ見舞ふては不  
 落の致したを少取つて参らうと存する、誠に此あたり方々に瓜を作  
 つたれども某がやうなひござらぬ、畑へは毎日見舞はねばならぬ、  
 是が身共が畑ぢや、ヤレく嬉しや夥しうあつた、思ひ出した、い  
 つも畑へ獸物がついて瓜を荒す、人形を作り置かう、一段よい、明  
 日見舞ふては不落を取らう 盗』是は此あたりに住居致す者でござ  
 る今日所用でござつて山一つ彼方へ参つてござるが道に見事な瓜のな  
 つてあつた、私にお目を掛けらる、お方に瓜好きな人ぶござる程に今  
 夜あれへ参つて四つ五つ取つて参らうと存する、方々に瓜畑のあま  
 たござれ共今日見て置たやうな見事な瓜ひござらぬ、此あたりにあ

記 言 狂



つたがどの畑ぢや知らぬ、是ぢや、先づ垣杭をぬかう、さア畑へい  
 いたが番の者はいか知らぬ、有るならば聲をたてうがない物ぢ  
 や、晝見たらば瓜がいかい事見へたが夜ぢやによつて見へぬ、是が瓜  
 そうな、瓜かと思ふたら枯葉ぢや、瓜にあたらぬ、此やうな事では  
 瓜を取ることはなるまい、何とした物であらう、思ひ出した、夜瓜  
 を取るには轉びを打つて取る物ぢやと聞いた、さらばこれから轉び  
 を打つて見よう、さればころ枕のように當つた、ヤ一つ潰れたは扱  
 もく、よい香ひぢや、爰にもあるは、後の方にも當つた、此様に  
 して取らば如何程なりとも取られう、ヤ、眞平御許されませ、私は  
 盗人ではござりませぬ、此方の畑があまり見事に瓜なりましたと  
 承はりました見物に参りました、命の義をお許されませ瓜二つ三つ  
 取りましてござる、皆返しませう、御免まつて下されませ、ヤ申し、  
 ノウ之はいか事うしにくらはれ扱もく、よい膽を潰いた、瓜主か

と思ふていくせのことを思ひ迷惑した此様にようもく、上手が作つ  
 たものぢや其儘人のやうな、獸物が見たらば膽をつぶいてあたりへ  
 はよるまい、此奴故思ひもよらぬ膽を潰いた、重ねて来る事でのな  
 し、打こかいてのけう、腹の立つ事ぢや、瓜づかも引ひしつてのけ  
 う、よい仕合せ急いで戻らう 瓜「昨日瓜畑へ参つた、まだ臍落が  
 致さなんだ、今日は大方臍落がござらう、取つて参らう、内のもの  
 をやれば瓜を盗み居るによつて某の毎日参らねばあらぬ、之はいか  
 を事散々に畑を荒いて置いた、是はサテ瓜づかも引ひしつて置きを  
 つた、其上人形を打付けて置きをつた、是はいかさま獸物のわざで  
 は赤い瓜盗人めゆふべうせたものであらう、扱もく、腹の立つこと  
 ぢや、今夜は某が案山子になつて捕らう、定めてゆふべの味を得て  
 また今夜も取りに参らぬことはあるまい 盜「よそへ物をやる共あ  
 とさきの分別してやらうことぢや、盗んだ瓜をさるお目を掛けらる



方へ進上致したれば、扱もよい瓜ぢや之の其方が手作かど仰られたによつて、中々私の手作でござると申したれば、扱もよい瓜ぢや近頃無心なれども客がある程に、瓜をマ四つ五つ呉れいと仰らるゝ何共返事の致しやうがなうて畏つてござると申した、某の手作でござると申したによつて今更なますまいとも申されぬ、是非に及ばぬ今夜あれへいて瓜を取つて参らうと存する、此様にまた参らうとは知らいで瓜畑を散々に荒して置いた、瓜主が見舞はぬことのあるまゝい、見舞ふたならば腹を立てゝ今夜の番をして居る事もあらう、何とやら胸騒ぎのして氣遣ひな、此島ぢや、イヤ夕べ垣を破つて置いたが其儘ある、定めて瓜主が見舞はなんたものであらう、見舞ふたならば此様にしては置くない、さればこそむしつて置いた瓜蔓の其儘である嬉しいことぢや、ヤ、是はいかな事不思議なことぢや、夕べ人形を打こかいて置いたが又立てをいた、是は思へば瓜主が見舞はぬで

は奇い。合点のいかぬ、ハア合点した、定めて内の者のわざであらう、主が畑へ見舞ふてこいと云附けたによつて見舞ひしたれども人形ばかり立て置いて垣も其儘で戻つたものであらう、惣じて下々はこれらも此様なことぢや、殊に此かゝせは夕べよりは猶よう人に似たイヤ思ひ出した、いつも盆になれば若い衆が踊りをせらるゝ、當年の中踊りに鬼がせめる所をせうと云はれた、幸のこと此人形をば罪人にして某が鬼になつて責めて見やう、ワイくゝよい杖もある、急いで責めて見やう、いかに罪人、地獄遠きにあらす極樂遙なり、急げどころ、ハ、先づ鬼の責は之のよからう、人形ぢやによつて責力がない、さりながら之もくじてあらう、某が罪人に取り當ることともあらう、此人形を鬼にして身共が罪人にかつて責められて見やう、幸いよき引綱がある、アテ悲しや是程参り候に、さのみな御責玉ひず、行けと行かれぬ死出の山、行かんとすれば引止む、止れんば



杖でちやうど打つ、ヤ是はいかな何者やらつぶてを打つた、あたりに人はあいが不思議なことぢや、何者の打たず知らぬ、合点がいかぬ今此綱を引て肩にかけたれば打つたが、ハア扱もくよう持えたものぢや、此綱を引けばわかる、さげると下る、バツタリく、扱もくればかしいこと哉、百姓は賢いものぢや、之なれば氣遣ない、さらばモ一度責められて見やう、行けと行かれぬ死出の山、行かんとすれば引とめ、止まれんば 瓜「ガツキめやるまいぞ」 盗「アラ悲しや許させられ」

(十) ○八句連歌 二人

庄左衛門 長ばかまぢいさ刀 九郎次郎 長ばかまぢいさ刀

庄「罷出たるのあたりの者で御さる、左様に御されば九郎次郎と申す者に、少米錢のひかへて御さる、追々人をやりますれども終に算用を致さぬ、今日は自身参り算用を致せうと存する、ヤレサテ憎

狂言記

い奴で御さる、用ある折は色々追従などを申し今は却て悪口おきを申すするげな、イヤくとかふ申す内には是で御さる某が聲と聞いて御さるなら定めしあはぬで御さる、假聲を致し呼出させうす、物も御案内 九「やうささどくや、表に案内が有る案内はたそ 庄」庄左衛門でおりやる、九郎次郎殿内にござるか 九「南無三寶かのえて御さる、留守を遣ひませう、九郎二郎唯今に用御ざりそへ参られて御さる、おはいりあされませい 庄」さうれえやるの誰でおりやるぞ 九「イヤ隣の者で御さる 庄」其儀ならば庄左衛門用有て参りたれどもおめに掛らいで戻つたとおまやつてたもれ 九「畏て御さる 庄」ヤレサテ今の九郎次郎の聲で御ざつたが留守を遣ふて御さる、彼奴めいつも裏道へはづすと申す、裏道へひけて参らうす 九「ヤレサテあぶあい事哉、既にあはうと致した、又わすればわるい裏道へひけて發しませうす 庄」イエ、こゝな 九「ハツ、嬉し悲



しうよう御ざりました 庄『ノウ九郎次郎、人に差合ふての言ことばのあま  
 た多ふおぢやる、嬉し悲しいといふうゑた事が、九』さればの事で  
 御ざる、お前御出いでの由を承はつたによつて、あはひで叶はぬお方ぢ  
 やと存じて裏道へれたかけますとて、躓けつみきましたたが悲しう御ざ  
 るやら、唯今おめに掛つたが嬉えう御ざるやらで、嬉し悲しいと申  
 して御ざる 庄『ノウ九郎次郎、いかう口上が上つたの、それにつ  
 き某それがくるの別義わかでおりやらぬ、かの事に参つた、算用をしてた  
 もれ 九』さればの事で御ざる、身共もどう算用を致したいやう  
 に存じたれども、彼是致して遅なはつて迷惑に御ざる、やがての内  
 に屹度算用を仕りませう 庄『ノウ九郎次郎、其方そなたの頓やてくはいつ  
 ぢやからのとでおりやる、あふたころは幸あれ、算用を致し 九』ど  
 うおのぢやれても今日はなりません 庄『ノウ九郎次郎、ならぬとお  
 ぢやつた分での埒らちがあくまい某が方へひけておぢやれ 九』私の参

狂言記

つたとても錢金ぜにがねにはありません 庄『ならうとなるまいとおぢや  
 れ 九』オ、参れなら参りませう 庄『おりやれく 九』ハッ  
 庄『程なう是でおりやる 九』扱あく御普請をさされたによつてお  
 家も見念れてござる、此時分をば存じましたらば手傳に参りませう  
 物をば 庄『オ、過分あまにおりやる、手傳人は數多おほくはねぢやつた  
 の 九』何が扱あさやうで御ざりませう、ワ、床をささつぢやれて御ざ  
 る 庄『されば床をいれてねぢやる 九』定めて是は懷紙わいじの掛りまし  
 たが屋固やかための懷紙で御ざりませう 庄『ノウ九郎次郎、わが身の懷紙だ  
 ての早いぢや 九』是の扱あ迷惑めいわくなどを御意なさる、お前の銀子を  
 負ひましたのもわるい事に遣ふたでも御ざらぬ、若い折に個様な事  
 になつさはりましたる故をもちいま以て遅なはり迷惑致すで御ざる  
 庄『ノウ其方そなたの見上たことをいふ人ぢやシテ今も習ふか 九』何  
 の扱あ此時分に参つて御ざるならば下の句をぞは致して見ませうもの

狂言記



狂言記

を 庄『いよ／＼の事をいはいします人ぢやシテ此手は見知りやつ  
 たか 九』されば懐紙のくらしいは大方合点でござるがお手は見知り  
 ませぬ 庄『見知りやらぬは道理、かなん法師が手でおりやる 九  
 『イエ、此お手がかなんばうし様の遊ばしまして御ざるか、是は扱親  
 御よりも生れ上らつゝやれたる事で御ざる、あのれんの字のはねた  
 せいなどは見事で御ざります 庄』ようおりやるかの 九』成程結  
 構なお手で御ざる 庄』シテ何もマをつとも上らうなと思やるか 九  
 『此お手はやねさへなくば天迄も上らうお手で御ざる 庄』ハレ、さ  
 れ言をいふ人ぢやいざ若い衆を集めて百句か二百句か致さう 九  
 『是の又あまりぎような事で御ざる、お前と身共と表八句致しませう  
 庄』それがようおりやらう 九』字がさくば直し徳に致しませう  
 庄』オ、稽古の爲ぢや程に互たがひに直う 九』よう御ざりませう、先  
 づ遊ばしませい 庄』イヤ／＼客人發句に亭主脇といふ事が有る、先

狂言記

づ其方そなたからおまやれ 九』畏つて御ざる、かうも御ざりませうか  
 庄』何と 九』花盛り御免なれかし松の風と致しまして御ざる 庄  
 『ワア是は見事でおりやるわいの 九』遠退とほのひきまして御ざる程に何と御  
 ざりますか 庄』イヤできておりやる、さりながらうつと字がさ  
 すわいの 九』さらば直さつゝやれませい 庄』花までいよくおりや  
 る、此御免の免の字をとつてすて、ごめんおさじや松の風がとうね  
 りやる 九』イエ字さへ餘りて大事御ざらずは御免の字は百も二百  
 も云ひたい所で御ざる 庄』おたらかうもおりやうか、櫻になせや  
 雨のうき雲と致しておりやる 九』扱も／＼さすがで御ざる、でけ  
 さつしやれて御ざる、さりながら、慮外りやうがいながらちつと直したい所が御  
 ざります 庄』あらば直しやれ 九』櫻までのよう御ざります、な  
 せのせの字をとつてすて、櫻になすな雨のうき雲と致したい句で御  
 ざる 庄』イヤ／＼、是はなせのせの字でもつた句と思ふ 九』した



狂言記

らばかうも御ざりませうか幾度もかすみにわびん月の暮 庄「かうもねりやらうか、こひせめかくる入相の鐘 九「ア、申し 庄「何とめさつたぞ 九「さればの事で御ざる、お前の金を負ひましたのは最早案じ暮すにまつて、かねのねの字ア、いかう耳へ響きました、さりながらかうも御ざりませうか、雖もせめて別れはのべてあげ 庄「人めもらすな戀の關守 九「なのたつにつかひあつけず忍妻 庄「お待やれ 九「何のおきにさはつて御ざる 庄「其方の所へいつか名のたつ程使をたで、たりやるぞ 九「申しなにと聞つしやれて御ざるがね前は戀の句では御ざらぬか 庄「中々 九「戀など、申すは間の使が洩しますれば必ず名のたつものでござる、したによつてなのたつに使あつけず忍妻と致して御ざる 庄「扱もく聞誤りてれぢやつた、でけた句でありやる、何がな其方に褒美がだしたいがバア何があ、ヤコレく之をお手前にだろ 九「何でござります

狂言記

るぞ 庄「イヤお手前の是は借狀でおぢやる 九「ハレサテ遅なはつたさへ悲しう存するに、其方に止置かつしやれて下されい、やぶての内に屹度御算用を相たてませう 庄「シテいでやおぢやるか 九「はいや申しいやでは御ざりませぬ 庄「其儀ならバ唯も得取りやるまい程に句をつけておまつしよ、餘り慕へばふみをとろやれ 九「ハ辱なうこそ御ざります 庄「又用ある折はいふておりやれ 九「ハッ、やさしの殿の心やないつなれぬ花の姿色現はれて此殿のかり物を許さるゝ、たぐひなの殿の心やな、ヤレサテ之さへねかねば心ずつきり

(一一) 餌さし十王 五人

餌さし 白水衣 半袴 棹を持 十王 狩衣 さしぬき  
鬼頭巾 半袴

王次第「地獄の主閻魔王く、六道にいざや出うよ、ヤイく眷



狂言記  
 族共居るか 三人鬼「ハア是に居り升 王」罪人が参つたら地獄へ逐落し候へ 鬼「畏つてござる 餌次第」罪も作らぬ罪人のく、誰かはよつてせかうよ、是は娑婆に隠れもない清頼と申すゆさしでござる、我壽命の程も定りけるか無常の風にさるれ唯今冥土へ趣き候住なれし娑婆の名残を振棄て、く足に任せて行く程に、六道に早く着きにけり、之はハヤ六道の辻に着てござる、之より見計らい極樂へ参らばやと存する 鬼「ハアいかう人臭い、さればこそ罪人が來た、先づ此由申上げう、いかに申し候、一段の罪人が参りて候 王」急ぎ責落し候へ 鬼「畏つて候、いかに罪人、地獄遠きにあらず極樂遙なり、急げく」ところ、ヤイく「汝は常の罪人とい變り興がつたなりぢや、ハテは何と云ふたものぞ 餌」某は娑婆に隠れもない清頼と云ふるさしでござる 鬼「餌さしならばあけくれ殺生して罪か深からう地獄へ責落してくれうぞ 餌」イヤく「某は左様に罪の深

狂言記  
 い者でいござらぬ極樂へやつて下されい 鬼「イヤく」先づ閻魔王へ伺はう、いかに申し候 王「何事にてあるぞ 鬼」罪人は娑婆に隠れもないゑさしにてあると申す程に、一入殺生して罪が深くござあらうする間地獄へ落さうと申し候へば、左様の者にてはなきと申候が何と仕らうするぞ 王「さあらば其罪人の此方へ呼び候へ 鬼」畏つて候、コリヤく「閻魔王の召す、此方へ來り候へ 餌」畏つてござる 鬼「罪人のめして参り候 閻」如何に罪人、汝は娑婆にて明暮諸鳥をさし大惡人にてある間地獄へ落さうとするぞ 餌「仰御尤に候へ共鳥をさし鷹と申すものに食はせて養ひ候程に餘り答にてはなく候 王」扱は鷹と云ふも同じ鳥にてあるよナ 餌「中々左様でござる 王」うれければ餘り汝が答でもない 餌「御意の通り鷹が答でこそ御坐れ私の答ではござらぬ、極樂へやらせられて下され 王」それならば此閻魔王も終に鳥といふ物の味を知らぬ程に、鳥と云ふ物



狂言記  
 が死出の山の深山にある程に、汝が持た棹でさいて閻魔王に振舞へ、  
 ろれなら汝が望のやうにして取らせうぞ 餌「それは何より安い事  
 でござる、さらば鳥をさいて進上申ましょ、イデ〜諸鳥をさ〜ん  
 とて〜、死出の山路の南はらより、鳥共數多飛び來るをば見るよ  
 り早く中ちゆうにてさいて取つたりける、さらば此鳥を燒鳥にして進せ  
 ませう、さらば参りませ 王「ドリヤ〜食ふて見よ、メリ〜  
 扱あつかもいかうむまい事哉 餌「さらば眷族達も参れ〜 鬼「心得た  
 く〜メリ〜〜是は〜うまい事哉〜 王「扱あつかも〜いかうう  
 まい物ぢや此様なうまい物哉呉れた程に暇を取らするぞ、娑婆へ歸  
 り三年みよせが間諸鳥をさいて暮せ 餌「是は有難い事でござり升 王「イ  
 デ〜暇を取らせんとて〜、娑婆へ歸り三年が間諸鳥をさして鶴  
 雁雉子鴨に鳥も慥に届く可しと、仰を委く承りて歸りければ閻魔王  
 も名殘を惜み、玉の冠を清頼に與へ玉ひければ、辱はぢくも頂戴致しく〜

て再び娑婆へ歸りける

(一一一) 笥争ひ 三人

畑主 牛袴 上下 腰帶 藪主 同 男 長袴 小き刀

狂言記  
 畑「罷出たる者は此あたりに住居致す者でござる、某は畑を數多持  
 てござるが當年の某の畑へ隣の藪から根がさいて笥がきたと申す、  
 今日けふは参りチト笥を取つて参らうと存ずる、誠に世の中に蒔たもの  
 はゆるは尤でござる、蒔かぬものゝ生ゆると云ふことは重寶なこ  
 とぢや、参る程に是ぢや、扱あつかも〜見事な笥が出来た、先づ是は折ま  
 せう、ポン〜、扱あつかも〜見事なことや 藪「罷出たるものは此あ  
 たりあたの者でござる、某藪さかをあまた持つてござるが、當年は笥が大分  
 出来てござる、今日けふはチト藪へ参り垣かきなともゆはせ人の取らぬやう  
 に致さうと存ずる、惣じていつとでも笥時分には人が取たがること  
 でござる、ヤア参る程に是ぢや、扱あつかも〜夥おほしう出来た 畑「アポン



狂言記  
 〱 藪「コレ〱なせに其筈を取らします 畑「ヤアお出やつたよ、  
 何と、此筈をなせに取る 藪「中々 畑「之は身共の畑へ生へたに  
 よつて取る、わどりよの構いぞ 藪「尤畑の共方のなれ共竹の根の  
 さいたはこちの藪からぢやによつて取らすることはあらぬ 畑「わ  
 どりよは無理な事を云ふ、どふでも身共が畑へ生へた故取らねばお  
 らぬ構やるを 藪「お主はていと取るか 畑「ていと云ふて何とす  
 る 藪「目に物見せう 畑「夫は誰ぞ 藪「身共の 畑「そちが物見せ  
 だての置いて呉れい 藪「悔むな 畑「悔むことはおりない 藪「おの  
 れは憎い奴の 畑「ヤレ出合へ〱 男「ヤイ〱是は何事ぢや〱  
 先づ待ちやれ、是のどうした事ぢやぞ 畑「ヤアよい所へお出やつ  
 た、先づお主も聞てたもれ、あれが身共筈を取るによつて取らすま  
 いと云へば、是非取らうと云ふ故に追廻はす、取らぬやうに云ふて  
 たもれ 男「尤ぢや其通り云ふてやらう、それに待たしめ、ノウウ〱

狂言記  
 わどりよはなせに隣の筈を取るぞ 畑「ヤア其方のよい所へ出さし  
 ました、先づ聞て呉れさしませ、隣の筈を取りは致さぬ、身共が畑へ  
 生へた筈を取れば取らすまいと云ふによつての事でありやる 男「扱  
 はわどりよの畑に出来たか 畑「中々 男「是はあれのが無理ぢや  
 其通り云はう、今の聞しましたか 藪「中々聞た、尤も畑へ生へたれ  
 共、根をさいたは此方の藪からなれば筈を取らすまいと云ふことぢ  
 や 男「尤もろうなれ共ううは云はれない 藪「いはれない、お主頼  
 むことではない退しめ 男「先づ待ちやれ、其通り云ふて見やう、今  
 のを聞かせられたか 畑「それは無理なことを云ふ、尤根をさす所は  
 隣からなれ共畑が身共が畑ぢや、取らねばならぬ、それならば今か  
 ら根のさゝらぬやうにせいと云ふてたもれ 男「ノウウ〱それさら  
 ば今から根のさゝらぬやうにしてたもれと云はる、 藪「扱も〱  
 いへばいはる、物ぢや、それならば身共もまたあれが方から取る物



狂言記

がある取つてたもれ 男「それは何ぢや 藪」いつやあれが牛が身共が馬屋で子を生んだなれ共、身共は律義に親牛も子も皆牽かせてやつた、それならば其時の牛の子はこちへをこせと云ふてたもれ 男「心得た、ノウウ」最前からのそなたは其方の理分りぶんにしてやらう、其代りに牛の子ををこせいと云ふは 畑「扱も」云へば云はる、事哉、乍去お主も思ふて見やれ、牛の子と筈とは一ト口に云ひれまい 男「イヤ」兎角身共が思ふには此様に互に云ふては埒が明かぬ、此上は何ぞ勝負をして其勝まけによつて牛の子をやる物かやらぬものかにせう、何とあらう 畑「シテ勝負には何を致さう 男」されば何がよからうが 畑「身共は歌をよまう、あれもよむか問ふてたもれ 男」ノウウ」是では埒があかぬによつて勝負に歌をよまうと云ふが、其方そなたもよむか 藪「あの人の歌は遂に承はらぬ、うれなら先づあれからよめと云ふて下され 男」サア」急いでよましめ 畑「かうもど

狂言記

ざらうか 男「何とノ 畑」我畑へ隣の竹の根をさいて思はず知らぬ竹の子を取る 男「一段と出来た 畑」あれにもよめとおしやれ 男「サア」急いでよましめ 藪「かうもどざらうか 男」何とノ 藪「我まやで隣の牛の子を生みて思はず知らぬ牛の子を取る 男」一段出来た、乍去是も同じやうな事ぢや重ねて何ぞ勝負をしやれ 藪「それならば此度は角力を取らうと云ふてたもれ 男」ノウウ」角力を取らうと云ふは 畑「如何にも取りませう 男」うれならばお出やれ 藪「サア」行司をめされ 男「心得た、お手ツ 二人」イヤ」 藪「勝たが」 畑「ノウウ」あのやうに棒で打まはする角力は遂に取つたことがござらぬ、棒を下に置いて取れと云ふてたもれ 男「ノウウ」其棒を下に置いてお取りやれ 藪「イヤ」之は身共の一方の足ぢやによつて下に置くことはならぬといやれ 男「ノウウ」下に置くこといならぬと云ふは、兎角あの棒に取附けば



よい程に棒をお取りやれ 畑「心得た、うれからばモ一番取らうと  
おいやれ 男「モ」番取らうと云ひる、 藪「いかにも取りませう、  
サア」行司をなされ 男「お手ツ 畑「ヤア」お手かつたが、  
藪「ヤイ」角力は三番物、ぢややるまいか、其足をかや  
せ」

(二三) 笠の下 二人

僧 頭巾 衣笠 宿 長袴 小き刀

僧「吾は佛と思へども、人は何と思ふらん、思ふらん 僧「かや  
うに候者は貴い出家にて候、吾未だ都を見ず候程に、唯今都へ上り候  
住慣れし吾古寺をひよつと出て、足に任せて行く程にうんじや  
うろこにつきにけり、急ぎ候程に、何處ともなく着て御ざる、日の暮  
れて候程に、あれなる在處に立寄り、一夜を明さばやと存ずる、物  
も 宿「誰う、ヤア 僧「是は旅の出家にて御ざる、日の暮れて候間一

夜の宿を貸して下されい 宿「安いことにて候が、此處は一人出家に  
宿貸すとが禁制にて御ざる、おりますまい 僧「ハッ、どハ尤にて  
候へ共出家の悪い事は致さぬ物でござる、一夜是非とも貸して下さ  
れい 宿「イヤなりませんまい 僧「まかとなりますまいか 宿「ハテ  
ならぬといへば 僧「ならざるようぢややるわいの 宿「ハテすにこい  
坊主の 僧「わこれうが宿貸さぬとて夜を明さすにやうか、と申  
ても何處へ参らうやうもならず、だうぞ分別で、宿借りませう又お  
案内も 宿「又案内がある、最前の出家ぢやよ 僧「ハッ、最前の坊  
主で御ざる、私の何處に伏せつても苦しうござらぬ此笠ばかり預け  
たう御ざる、一夜預らつてやられて下されまいか 宿「オ、笠ばかりは  
苦しからぬ事、何處になりともおさやろ 僧「イヤ大事の笠で御ざ  
る程に坐敷の真中に置いて下されませい 宿「フン、それは何處にな  
りともおさやろ 僧「ハッ辱う御ざる、さあらば爰元におさせう



狂言記  
 宿「ノウ〜夜が明けたらば早々どりにおぢやれや」僧「畏つて御  
 ざるさらば〜、ハッ、やどはかつたものぢや、先づ此笠をきて一  
 夜を明しませう、ハア、最早御經時ぢや經をよみませう」宿「あら  
 不思議や、坐敷に經聲がするが何者ぢや、知らぬまで、ハ是のいかな  
 る事、最前の坊主が坐敷の中央まんなかに松茸の生へたやうに笠をさている  
 其所にいられるは最前の坊主ではないか」僧「中々、最前の坊主で  
 ぢやる」宿「誰に宿をかつているぞ」僧「ノウ〜御亭に尋ねたい事  
 が御ざる」宿「何事ぞ」僧「此お家は何人だれの家で御ざる」宿「之は身  
 が家でおぢやる」僧「此お家の内は此方こなたの儘で御ざるか」宿「なん  
 でもちい事、家の内の物の皆身共が儘でれぢやる」僧「此笠は誰が笠  
 でおぢやるの」宿「それは其方そなたの笠でおぢやる」僧「宵よより預けま  
 したは合点でれぢやるか」宿「オ、笠ばかりは預つておぢやる」僧  
 「笠を預けたはぢやら、笠の下の笠が儘よ、身は笠に宿借つてれぢや

狂言記  
 宿「是はいか事坊主めが理詰にまをつた、シテ又笠よりでた  
 處のなんと」僧「それは其方そなたのやしきの内ぢや程にかひてなりとも  
 はつつてなりともおどりやる」宿「まかどか」僧「中々」宿「爰あの出  
 た」僧「どつこい」宿「イヤ爰あが出た」僧「イヤ心得た」宿「アハ扱あも  
 〜氣のくすりな坊主ぢや、一夜を貸しませう、ノウ〜」僧「何  
 で御ざる」宿「あまりふびんに御ざる程に、一夜を貸しませう、笠  
 をどつてゆるりと休まつまやれい」僧「イエ御亭ごてい様の、笠をとらせ  
 て、追出さうと思ふて」宿「弓矢入幡實でれぢやる」僧「此上からの  
 先づ家主から卸しませう、アテ究屈や〜」宿「扱あも〜御坊は面白  
 い人ぢや、夜と共に話しませう」僧「扱あも〜辱おとし御ざる」宿「ナウ  
 御坊、酒を一つ參らぬか」僧「辱おとしは御ざるが私の五戒を保ちます  
 る、とりわけ飲酒せんじゆかい戒かいとて殊の外酒を戒めて御ざる、下された同前で  
 ござる、辱おとしころ御ざれ」宿「扱あ々貴い出家哉、是非に及ばぬ、某







あで玉ふ、今より後ちに衆生を地藏に預け置くなりと、仰罷被り走りまはりめぐれど、うやの、人が憐れみお茶一ふくくれざるに、此坐敷に参りて、七斗入にたうくゝゑんにちにまかせて二十四杯飲みければかうじの花がめに上り、左の方へよろゝく、右の方へよろゝくよろゝくゝとよろめきわたる地藏はうの踊つたを見さいの、はつひやりくゝ、はつはいひやろのひつ

(一四) 寝音曲 二人

主 長袴 小き刀 冠者 半袴 上下 腰帶

主 罷出たる者は此あたりの者でござる。某 召仕ふ下人が身共に暇を乞はいで何方へやら参つてござる、承れば前夜歸つたどやら申せども未だ某に目見へをせぬ、言語同斷憎い奴でござる、今日の彼奴が宿へ参り屹度折檻を致さうと存する、ヤレく暇をくれと申したらひまを取らせう物を乞はぬ所が憎うござる、ヤア参る程に是

ぢや、身共の聲は聞知つて居る、假聲をして呼出さう、物もう案内もう 冠 ヤラ奇特な、夕べ歸つたを何方やら御存知で案内どわる、物まうは何人でござる 主 しさり居れ 冠 ハア 主 俄の慇懃迷惑、おのれは誰に暇を乞ふて何方へをりうふた 冠 其事でござる 一人召仕はる、下人の事でござるによつてお暇は下されまいと存じ京内参り致してござる 主 何と、一人召仕ふ下人の主に暇乞はいで京内参りする筈か、乍去存する仔細ある、此度は許す程にうこそ立て 冠 うれは信實でござるか 主 中々眞實ぢや 冠 ヤラ心安や嬉しや 主 ヤイく此度は許す以後をたしなめ 冠 畏つてござる 主 シテ都でい何處くを見物した、珍しいこといなかつたか 冠 別に珍しい事もござらぬが都に面白い小謳がのやりました 覺えて参りました 主 それの出かした、聞かう程に謳ふて聞かせい 冠 畏つてござる、乍去私の謳ひますに酒をたべませねば聲が



出ませぬ、一つたべて謳ひませう。主「うれなら酒をのふでなりと  
も謳ふて聞せ。冠「一つ下されませうか。主「サア〜之で飲め  
冠「是は大盃でござり升、お酌慮外でござる。主「苦うない飲め  
冠「ハア是を一つござり升〜、さらばたべましよ。主「扱も氣味の  
よい飲みやう哉何とあつたぞ。冠「イヤ唯ひいやりとして覺えがござ  
らぬ。主「うれならもう一つのふで覺え。冠「下されませう、ハア是  
々ござり升〜、扱も結構な酒を澤山に下されませうと哉、今覺え  
ましたよい酒でござる、終に覺えませぬ酒でござる、そ一つ下され  
ませう。主「最早いらぬ物。冠「こんが悪うござる。主「うれから飲  
め〜。冠「是々又一つござる〜、是は一口息に飲みませう、サ  
ア取らせられ。主「最早飲ませぬか。冠「それは〜とい取せられ。主  
「サア〜謳ふて聞かせい。冠「謳ひませうが私は横に寝て居ませぬ  
ば謳ふ事になりませぬ。主「謳ひが聞きたい程に許す寝て謳へ〜

冠「心得ました慮外ながら此方の膝を枕に致しませう。主「おのれ主  
の膝を枕にする物か。冠「イヤ〜私が枕にすると思召すな、謳ひ  
なさる〜と思召せ。主「それなら是非ない兎角早う謳へ〜。冠  
「心得ました謳ひませう、さんてうのもとはるさんの雨の夜草庵の  
内が思はる、主「面白いことぢやまた謳へ〜、餘り慮外な奴ぢ  
や枕を外してやらう、サア〜謳へ〜。冠「なせにやら聲が出ませ  
ぬ。主「うれから枕をしてやらう、サア〜謳へ。冠「是々是で謳  
はれます、謳ひませう、都なれや東山、之もまた吾妻のはてしあ  
人の心や。主「扱も々々面白いことぢや、まだ謳へ〜、ヤイ太郎  
冠者謳はぬか〜、之は扱寝入り居つて躰をかされる、扱々慮外な奴  
ノ、許して置けばはうれうもない奴ノ、起き居らぬか罰あたりめ。冠  
「都なれや東山。主「何の謳ひ聞きたうもない。冠「ア、許させられ  
〜。主「どちへうせるやるまいか〜



(一五) つんぼ坐頭 三人

髷 半袴 上下 腰帶 坐頭 布頭巾 水衣 半袴 杖  
主 長袴 小き刀

狂言記

主「罷出たる者は此あたりの者でござる、某<sup>それぞ</sup>二三日去る方へ参る、身共の使ふ者の髷でござる、あれ一人では留守が心元なうござる、うれにつき爰に菊市と申して出入致す坐頭がござる、之を呼びに参り相留守に頼まうと存する、急いで参らう、内に居ればようござるが何とござらうか、定めて宿に居るでござらう、ヤア何かと申す内には是でござる、物もう菊市内に居らるゝか 坐「ヤア表に案内がある、何人<sup>どなた</sup>でござる 主「イヤ身共ぢや 坐「ヤアようこそお出なされました、唯今の何と思召し御出<sup>おいで</sup>でござる 主「其事ぢや某二三日他所へ参る、うれに付身共の使ふ者は髷で何とも心元<sup>そなた</sup>ない、其方を相留守に頼みたら思ふて来た、来てくりやるまいか 坐「ようこそお出

狂言記

なされました、幸今日のひまで居ります、成程に参りませう 主「うれは近頃過勞、其儀ならばいざ同道致さう、サア〜れりやれ〜 坐「畏つてござる、慮外ながら手を引て下され 主「心得た、ノウ菊市此間は久しう見へなんだ、何として見へぬか 坐「さればでござります方々勤めますによりひまを得ませいでお見舞も申しませぬ 主「うれの一段ぢや、兎角ひまのないのようおりやる、ヤア早是ぢや、先づ奥へ通りやれ、それにゆるりと居やれ 坐「畏つてござる是に居りませう 主「髷々太郎冠者〜 冠「何ぢや、呼ばゝるか、何でござる 主「身共は二三日他所へ行くよう留守をせい 冠「何と二三日の内に雨が降らうかとおしやるか 主「イヤ〜そうではない、二三日他所へ行くよう留守をせいといふことぢや 冠「聞きました、二三日他所へ行くよう留守をせい 主「いかにもううぢや、又あれに菊市も来て居る程に云ひ合ふてよう留守をせいと云ふことぢや



冠「何と菊市が来て居ますか 主」中々 冠「いかにも云合ふてよう留守を致しませう 主」ソレソレは是へ出よ 冠「心得ました 主」菊市最早身共は行く程に聾も是に居る、云合ふてよう留守をしてたもれ 坐「畏つてござる、頼てお歸りなされませ 主」頼て歸らうぞ 冠「扱もく、あの菊市が目も見へぬなりで頼まるればとて留守に来るものか、もし盗人がはいつたら何とせうと思ふて来た知らぬ 坐」ヤア聾が身共が事をいふと見へた、聾々太郎冠者 冠「ヤア菊市かよう来た 坐」何と此中は久しうわはぬが息才さうな 冠「オ、此中はよい天気ぢや 坐」イヤさうではない此中は久しうわはぬと云ふことぢや、冠「さればく、久しうわはぬ、今日はよう留守にれりやつた 坐」其事ぢや頼んだ人の二三日他所へ行くとおしやつた程に留守来た、云合ふてよう留守をせうぞ 冠「是は聞た、いかに云合ふてよう留守をせうぞ 坐」乍去若し盗人はいつたら其方

は目が見へても耳が聞へず、身共は耳は聞へても目が見へず、何としたものであらう 冠「何ぢや其方は目が見ゆると云ふか 坐」扱も奇特ぢや、ううではない盗人がはいつたら身共は耳が聞へても目が見へぬが何とせうと云ふと 冠「聞いた誠にそちの云ふ通りぢや何とせうなア 坐」身共のつくく、思案するに若し盗人が這入つたら身共の耳で聞附けて其方の膝を突かう程にそれを合圖に防げ 冠「是は聞た、若し盗人が這入つたら其合圖に身共の膝を突かうと云ふか 坐」中々さうぢや 冠「是の一段よからう若し盗人が這入つたら膝を突け、身共が防らうぞ 坐」心得た、ア、扱もく、聾に物云へば性も心も盡さる事ぢや 冠「是のいかさことを坐頭と云ふものは知恵の深いものぢや、よい思案を思ひつけた 坐」ヤアいから寂しい、ちつと聾を弄つて遊ばう、ソリヤく盗人よく 冠「心得た、ヤレ盗人がはいつたぞ出合へく、やるまいぞく 坐」扱も



狂言記

く可笑しい事か、よう盗人が居よふ、是はよい慰ぢや、面白  
 いことかな 冠「ヤイ菊市盗人は居ぬハ 坐」何ぢや居ぬか居ようが  
 あつてこそハ、ハ、ハ、ハ、 冠「是はいかな事、坐頭めが笑ふが、扱は  
 身共をさぶり居つたと見へた憎い奴ぢや、致しやうがある、ヤイ菊  
 市身共は此中小舞を稽古してよう舞ふのそちが目が見ゆるから舞ふ  
 て見せたいナア 坐」それの面白からう、目ころ見へずと舞の聲を聞  
 て慰まう、舞ふて見せい 冠「ナント置けと云ふか 坐」イヤ舞へと  
 云ふ事 冠「うれなら舞はうか、乍去是も果た所で賞めねばなら  
 ぬ、其合圖に果た所で其方が顔をなでう、其時はめい 坐」ナン  
 ト、合圖に果た所で顔を撫るか 冠「中々 坐」いかにもほめてやら  
 う舞へく 冠「心得た、さらば舞ふぞ、通る熊野道者の、手に  
 持つたるも椰の葉笠にさいたも椰の葉、是はどなたのお聖様ぞ、笠  
 の内におゆかし、大津坂本のお聖ぢや、ア、くわんじやひじりぢや

狂言記

坐「エイヤア扱もく舞ふたりく 冠「是はいかな事目の見へ  
 ん者の何も知らぬ、身共が足で撫でたを知らいで嬉しが、扱もく  
 面白い事哉 坐」是は合点がいかぬ、あれがあの如くに笑ふ筈のな  
 いが、思ひ附た、扱は某が顔を脛で撫でをつたと見へた、扱もく  
 憎い事ぢや、ヤア返しに又致しやうがある、ヤイ髯、身共も今の返  
 禮に平家を稽古した、其方が耳が聞へるから語つて聞かせたいナア  
 冠「何と云ふぞ、平家を語る、よかるく語れ 坐」乍去語つても  
 其方が耳が聞へぬ程に、是も合圖に果てた所で手をさし上る程に其  
 時はめい 冠「何と手をあげるが合圖か 坐」中々 冠「いかにもほ  
 めう、語れく 坐」心得た、語るぞく、抑も是の髯めい、片輪者  
 の癖として、根生はすねふて臆病髯のやけ髯め 冠「エイヤア、扱も  
 く面白い事哉 坐」是はいかな事髯と云ふ者の己が身の上のこと  
 を云ふに知らいで出来たと云ふて嬉しが、是は可笑しいことぢや



狂言記

冠「ヤア又坐頭めが笑ふが、扱は身共が身の上を云ふたと見へた、又致しやうがある、ヤイ〜菊市、今の平家は面白かつた、身共も今一番舞をまふて見せうぞ。坐「何といふぞ又舞はふと云ふか。冠「合圖は最前の通りぢや、又顔を撫るぞ。坐「心得た、奇でいはめうぞ。冠「宇治のさらしに島にすさきに立浪をつけて、はんま千鳥の友呼ぶ聲は、ちり〜やちり〜ちり〜と友呼ぶ所に島影よりも櫓の音がカラリコロリとこぎ出して釣する所に釣つた所の面白や。坐「ドコエ、ぬかることではないぞ、面白いどの〜。冠「之は何とするぞ。坐「已がやうお奴のからして置たがよい。冠「ヤアおのれ坐頭の分として憎い奴の。坐「之は何とする。冠「おてつまいつたの。坐「ヤイ〜目も見へぬものを此様にしをつて生來かようあるまいぞやるまいぞ〜」

(一六) 墨塗 三人

大名 髪斗目 素袍 大臣烏帽子 小き刀 女 白小袖  
 物ばうし 冠者 半袴 上下 腰帶

狂言記

大「遠國に隠れもあひ大名、永々在京する所に訴訟思の儘に相叶ひ新地を過分に拜領致した、是程嬉しいことはござらぬ、先づ太郎冠者を呼出し喜ばさうと存ずる。ヤイ〜太郎冠者あるかヤイ。冠「ハア。大「居たか。冠「お前に居り升。大「汝を呼出すは別のことでもあひ、永々在京する所に訴訟悉く相叶ひ新地を拜領したは、目出度い事ではないか。冠「是は御意なさるゝ通りお目出たい事でござる。大「それにつき國元へおツつけ下るであらう、ううあらば彼人にまたいつ逢ふも知れぬ程に今日は暇乞に彼人の方へ行かうと思ふが何とあらう。冠「是は一段とようござりませう。大「それならいざ行かう、汝も供をせい。冠「畏つてござる。大「サアこい〜。冠「参り升。大「ヤイ〜此仕合を國元に聞たら今日か明日かと思ふて待兼



ねて居やうぞ 大「左様でござる、申し〜何かと申す内には是でござる、お出なされた通り申ませう、それにてござりませ 大「心得た冠」申しござり升か、頼ふだお方のお出なされてござる 女「ヤア珍しい聲がする、太郎冠者何と、頼ふだ人のござつた 冠」中々左様でござる 女「ナウ〜珍らしや、之はどち風が吹てお出なされた、此中久々見へませなんだによつて心元なう存じました 大「いかにも此中は久うおりやる、先づわごりよも息才で満足致した、それにつき太郎塔者今のこと云はうか 冠」仰せられませ 女「何事でござる心元なうござる 大「イヤ別のことでもまい、永々在京する所に訴訟思の儘に叶ひ近日國へ下る程に今日は其方に暇乞に來ておりやるは 女「ヤア〜何と仰せらる、國元へ下る、それなら又何時あひませうも知れまい、扱も〜悲しい事でござる 大「其方の歎は尤ぢや、去年國へ下つたらばたつとけ迎を上すであらう待

狂言記

つて居させませ 女「さう仰せられても此方の心の國元へござつたら變り、妾の事を念れさせられうと思へば悲しうござる 冠」是はいかな事實に泣かると思ふたれば顔へ水を塗つて泣かる、惜い事ぢや、申し〜一寸ござれ 大「何事ぢや 冠」あれを此方は眞實泣くと思召すか、あれは顔へ水を塗つて泣かれ升 大「何の其様のことがあらう、あれ程に別れを悲しがつて泣く者を何をわけもないことを云ひ居る 女「申し〜どちへござり升、お目にかゝるも少しの内でござる、爰にてござりませ 大「されば太郎冠者が用があると云ふたによつてあれへいたればわけもまい事を云ひ居つた 冠」是はいかな事、あれ程水を目へ塗つて泣くにまだ氣が附かぬ、思ひ附いた、致しやうがある、墨と取代へて置させせう 女「扱も〜悲しや〜、片時も放れぬやうに思ひましたれば別れになりまして悲しうござる 冠」扱も〜可笑しい事哉、取替て置たを知らいで墨

狂言記



を顔へ塗つ、たあの顔は、扱もく可笑しやく、申しくござれ  
 大「何事ぢや 冠」此方こなたの誠になされぬによつて私が水と墨と取替て  
 置きました、あの顔を見させられ 大「誠にあれぬ汝が云ふ通りぢ  
 や、扱もく欺たぶされた。憎いことぢや、何とせうぞ、思出した、此  
 鏡を紀念かたみぢやと云ふてやつて耻をか、せう 冠「一段とようござら  
 う 大「ナウく國元へ下つたらばねつ、け迎を上さうけれど、そ  
 れ迄の紀念ぢやと思ふて此鏡を見てたもれ、わどりよに之をやるぞ  
 女「扱もく愈悲しうござる、此様な紀念扱貫はうとは夢にも思ひ  
 ませなんだ、扱もく情ないことござる、ヤア是は何者か此様に  
 墨を塗らしをつた、ア、腹立やく、こあたがしやつたか腹立やく  
 大「イヤくおれは知らぬ、太郎冠者が才覺ぢや 女「知らぬとお  
 いやつても聞かぬ、墨を塗らねば置かぬぞ 大「是は何とする、顔  
 へ墨をぬつて、ヤレ許せく 女「ヤア太郎冠者めるこに居たか、

おのれにもぬつてやう 冠「之は何とめざる、此やうに塗られてど  
 ういふれうぞ、ア、許さつしやれく 女「どちへうせる、まだ塗ら  
 ねばからぬ、やろまいぞく



狂言記

NICKEL LIBRARY OR SEN SERIES



毎月二回發行  
定價一部五錢  
郵稅二冊迄二錢

袖珍  
美本

每編  
讀切

ニッケル文庫はあらゆる文庫全書類中に在て最も廉價にしてしかも最も價值あるものなり  
ニッケル文庫はポケット入の極めて体裁よき小冊子なり故に旅行の携帶には至極便利なり  
ニッケル文庫はあらゆる社會に向つて歡迎せらる極めて可き普通の極めて趣味多き讀切の Series なり

八十九

明治廿六年十月十三日  
内務省許可

發行所

版權所有

明治廿六年十二月十五日印刷  
同 十二月十六日發行

編輯者 矢矧佑一郎

印刷者 三島宇一郎

印刷所 弘文堂

東京市牛込區矢來町三番地

東京市牛込區 右 文 社

全神田區表神保町十番地 右 文 社 支 店

特約取次  
大賣販所

〔府下〕東海堂○東京堂○信文堂○巖々堂○有斐閣○吉岡書籍店  
〔地方〕札幌進振堂○外全國書籍店

八十八



ニツケル文庫出矣、諸君は少く共或異常の感を以て之に接し玉ふか  
 らん、蓋し其名の如何にも耳新しくして且其價の如何にも廉なるを  
 以て也、雖然諸君漫に驚き玉ふこと勿れ、ニツケル文庫は實に諸君の  
 渴望に應じて出てたるもの也、徒に奇を好み數を玩んで時好に投ず  
 るものには非る也、最も廉なる價を以て、最も簡なる手續を以て、手  
 輕に知識の普及を圖るは目今出版業社會の急務也。責任也。我ニツケ  
 ル文庫は實に此目的を以て生れたる也。我ニツケル文庫は其名に於  
 てこそニツケルなれ、其實質に於ては黄金白金自ら撰する者也、彼の滔  
 々たる世間安物主義の全書文庫類、唯安賣を主眼として材料の撰擇  
 を第二とする名詮自稱の安物類の如きは、我ニツケル文庫の架を同  
 ふするすら猶日愧る所也、安物を安く拵えて安く賣るの手段か社會  
 に歡迎せられたる時代の何時か過去の夢と消えたり、紙數の多き  
 と製本の美なるとのみを以てしては最早緻密なる現日本文字社會の  
 眼光を眩す能はざる也、彼般事業の結果、唯徒に流毒を社會に傳ふ  
 るのみにして些の功德をもなさざる也、我ニツケル文庫は假令大に  
 社會を裨益する能はずとす、少くとも些の流毒をもあすとな  
 きを期する也、ニツケル文庫の出来る實に今年今月今日を以て劃とす  
 予輩が力の續かん限り、予輩の運命の完からん限り、予輩の誓て其  
 發行を休滞せず、進み進んで百千編を累ねることを娛みとせん、若夫  
 諸君にして予輩の志を嘉せられれば、予輩は更に進んで規模を擴め、  
 シルバ(銀)よりゴールド(金)を出し、更に下ではコッパ(銅)のライ  
 ブラリイ(文庫)をも出す可し、諸君幸に予輩の企を賛せらるゝや如何

少年文庫主筆 齋藤湖漁史作  
 ニツケル 少年 大冒險 附録 鱈魚難  
 第一編 小説 全一冊  
 出で、熱砂の海に漂ひ、入つて、怪樹の洞に隠る、或は獅子に迫ら  
 れて、駝鳥の背に逃れ、或は象に追はれて、檳榔樹梢に潜む、洋上の危険  
 には海鵬と戦ひ、密中の災厄に、老犀を愚にす、一讀三嘆、通誦猶ほ  
 巻を措く能はざるもの、此大冒險の奇小説なり、本書龔に少年文庫  
 紙上に連載して好評を博せしもの、今乞ふて一本に纏め訂正を加へ  
 て梓に上す、大方有爲の少年諸子早く一本を袂にして樹下叢蔭の友と  
 なせ

湖處子宮崎八百吉君は明治青年詩家中の傑物なり、夙に心を新体詩  
 韻文の賦詠に潜め、多年心織筆耕、功成りて今や青年詩家の隨一とし  
 て青年者の歡迎を受けるに至る、其思想純潔、其調清雅、彼の信偏、整牙漫に  
 難字難語を用ひて俗人の膽を奪ふもの、類にあらす、少年詩文に志す  
 るもの、以て卓上の師とし、樹蔭の友となす可きは、此湖處子詩集の一編な  
 り、大方の少年子早く一本を求められよ

湖處子詩集 全一冊



郵便、電信諸條例、内外國附録 一冊和本半紙刷  
貨幣、度量、衡、里程比較附録 百二十ページ

### 金蘭簿

和本並綴 定價金七錢  
同別綴上製定價金十錢  
(更紗表紙綴)  
(郵税 並製二冊迄二錢)

此新案金蘭簿は金蘭斷琴の交友をして其姓名、住所、職業、身分、生年月は勿論信仰、主義、希望、嗜好、得意等他年生死の別離をなせる後紀念となり心像となす可き件々を記入せしむべき幾多の欄を設け又寫真若くは自筆の書畫を貼附記入せしむ可き一欄さへ設け置きたり軍人、學校生徒、俱樂部、會員等にして連合の上十部以上の前金注文の分は定價より一割引を以て需要に應ず可し

### 少年立志双六

定價四錢  
郵税二錢

新規類なしの妙趣巧なり早く求めて投賽一番未來の運を試みられ

佐々代議士題詩 原抱一庵主人著

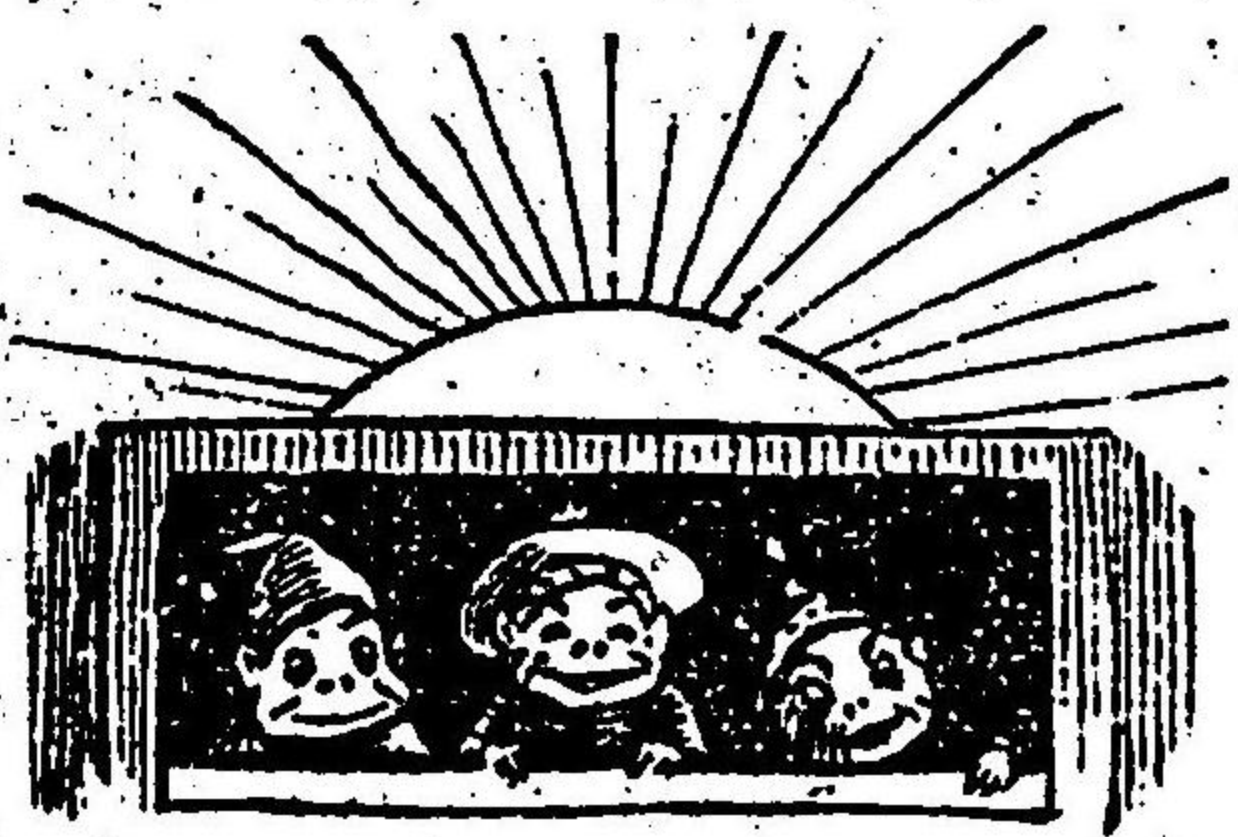
## 西南戰場逸話

大判 美本  
全 一 冊  
定價金十五錢  
郵税 四錢

十年西南の役は明治歴史中の大々出來事なり、貔貅十萬、肥薩日隅の野に咆吼し、屍山立ち、血河流れ硝烟漲り、彈雨注ぐ、其大活劇の歴史ハ世間早く既に公けにせられたるもの多し、然れども其正史以外の遺聞奇事に至ては、唯當時實地に戰場を踐み、戰狀を目撃したるもの、話頭に上るのみにして、未だ一本に集めて公にしたるものあらず、況んや俗傳附會の説多くして事實を誤るの害あるを原抱一庵氏夙に之を慨し、親しく當時銃劍を手にして修羅の巷に奔走したる人々に就て其談話を集め、流暢雄渾の筆に上せて未知者に頒つ、西南戰場の逸話、遺聞、之によつて永く天下後世に傳はらん



# ポチン画ばし



全一冊

色ずり美麗ある石版  
畫奇々妙々快活  
洒落なる墨刷  
木版畫大小  
て百一拾圖日本未だ此類の  
凡一本を求め玉へ

一部 金四錢

郵税二冊迄金二錢

だれにてもわかる。しごくおもしろい。とほけたるばなしです。こどものみやげねくりものにはしごく妙です。猿まねのせ物が近い内に出来るとの評判です。まらかへて下さるを。

●初版四千部一週間再版  
にして忽ち賣盡し

## 受驗必讀 支那歴史大要一覽

全 定價金三錢五厘  
郵税二錢

○復雜にして綱系を搜り易からざる支那歴史を最も見易き一部の表に  
○作り且略史を附したる者にて支那歴史の研究者には不可欠良著也  
○中學校師範學校生徒諸君連合の上五部以上求められれば一割引の上郵税  
○の弊社負擔す  
○北村紫山校訂 阪東宣雄著

## 維新活歴史

全一冊 (定價十二錢)  
特別半價八錢 (郵税共)

○維新の革命は我國をして舊日本より新日本に轉遷せしめたる過渡に  
○して古今未曾有の大變なりされば其由來より結局に到る長日月  
○の間に錯雜百出したる幾多の變象は最史家の頭を悩ましむる所なり  
○此書は實に革命の大立者たる西郷南州翁を骨子となし天保の初より  
○明治十年に至るまでの生じたる國家の大問題を詳寫論究して一目其  
○原因結果を了解せしむるに近來の國家の大問題を詳寫論究して一目其  
○文字あり。這回印行者の依託により

特別半價

九十五







